

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

かに さわ  
蟹 沢 遺 跡  
うえ じょう  
上 城 遺 跡

1995

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 磐越自動車道関係発掘調査報告書

かに さわ  
蟹 沢 遺 跡

うえ じょう  
上 城 遺 跡

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

太平洋側のいわき市と日本海側の新潟市を結ぶ高速道路である磐越自動車道いわき・新潟線は、現在完成に向けて着々と工事が進められています。全線が開通すると、常磐・東北・北陸自動車道と連結し、それぞれの地域の社会・経済等の発展に大きく貢献するものと期待されています。

新潟県教育委員会は、昭和59年以来磐越自動車道建設にかかる遺跡の発掘調査を実施してきました。本書は、日本道路公団から新潟県教育委員会が委託を受けて実施した「蟹沢遺跡」と「上城遺跡」の調査報告書です。

調査の結果、蟹沢遺跡と上城遺跡は、縄文時代後期を中心とする遺跡であることが判明しました。調査対象地は、遺構や遺物が極めて少量しか検出されていないところから集落の縁辺部に相当するものと考えられます。

東蒲原郡内の考古学的調査は、これまであまりなされておらず、遺跡そのものの内容についても不明な点が数多くありましたが、高速道路等の発掘調査で各時代の様相が徐々に解明されつつあります。本書が今後の地域の歴史研究に、多少なりとも寄与するところがあれば幸いです。

最後に、本調査を進めるにあたって多大なご協力を賜った日本道路公団新潟建設局・同津川工事事務所をはじめ、三川村教育委員会・津川町教育委員会に対して厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

新潟県教育委員会

教育長 本 問 栄三郎

## 例 言

- 1 本報告書は新潟県東蒲原郡三川村大字小石取字蟹沢3508ほかに所在する蟹沢遺跡、同村大字小石取字上城4014ほかに所在する上城遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は磐越自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 2 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教育委員会と略す）が調査主体となり、平成3年度・平成5年度に実施した。なお、平成5年度の発掘調査については、県教育委員会が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託した。
- 3 埋文事業団は、発掘調査作業および関連工事について（株）吉田建設に業務を委託し、協力を得た。
- 4 整理および報告書にかかる作業は平成5・6年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教育委員会が保管・管理している。遺物の註記記号は蟹沢遺跡を「カニ」、上城遺跡を「ウエ」として出土地点・層位等を併記した。
- 6 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の図面を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
- 7 遺物番号は各遺跡毎の通し番号とし、文章および実測図・写真図版の番号は一致している。
- 8 引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 本書の作成は、藤巻正信（埋文事業団調査課第一係長）の指導のもとに、佐藤正知（同主任調査員）が担当した。本書は、佐藤を中心に分担執筆したもので、滝沢規朗（同文化財調査員）・上田順二（同嘱託員）がこれにあたった。分担は、第I章2および第III章4が上田、第II章1・2が滝沢、それ以外については佐藤である。なお、本書の編集は佐藤が行った。
- 10 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・助言を賜った。厚く御礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

河内一男・津川町教育委員会・三川村教育委員会



# 目 次

第Ⅰ章	序 説	1
	1 調査に至る経緯	1
	2 調査体制と整理作業	2
	A 調査体制	2
	B 整理作業および報告	3
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	4
	1 はじめに	4
	2 地理的・歴史的環境	4
	A 地理的環境	4
	B 歴史的環境	4
第Ⅲ章	蟹沢遺跡	6
	1 第一次調査	6
	2 第二次調査	6
	A 調査方法	6
	B 調査経過	8
	3 層序	9
	4 遺構各説	10
	A 土坑	10
	B 埋設土器	10
	C 竪穴状遺構	11
	5 出土遺物	11
	A 土器・陶器	11
	B 石器	13
第Ⅳ章	上城遺跡	16
	1 第一次調査	16
	2 第二次調査	17
	A 調査方法	17
	B 調査経過	18
	3 層序	19
	4 出土遺物	20
	A 土器・陶器	20
	B 石器	21
第Ⅴ章	ま と め	22
	《要 約》	23
	《引用・参考文献》	24

## 図 版 目 次

図 面	
図版 1	蟹沢遺跡遺構全体図 (1:400)
図版 2	蟹沢遺跡遺構個別実測図 (1・2号土坑、1・2号竪穴状遺構・1・2号埋設土器)
図版 3	蟹沢遺跡遺物実測図 (土器1)
図版 4	蟹沢遺跡遺物実測図 (土器2・陶器)
図版 5	蟹沢遺跡遺物実測図 (石器)
図版 6	上城遺跡遺物実測図 (土器・陶器・石器)
写 真	
図版 7	1. 蟹沢遺跡完掘 2. 1号埋設土器 3. 2号埋設土器 4. 1号土坑土層断面 5. 1号土坑完掘 6. 2号土坑土層断面 7. 2号土坑完掘
図版 8	1. 1号竪穴状遺構完掘 2・3. 1号竪穴状遺構土層断面 4. 2号竪穴状遺構土層断面 5. 2号竪穴状遺構完掘 6. 東西土層断面 7. 蟹沢遺跡全景
図版 9	蟹沢遺跡出土遺物 (土器1)
図版10	蟹沢遺跡出土遺物 (土器2・陶器)
図版11	蟹沢遺跡出土遺物 (石器)
図版12	1. 上城遺跡完掘 2. 基本土層断面 3. 下層調査風景 4. 下層2トレンチ完掘 5. 下層10トレンチ完掘 6. 作業風景 7. 重機による包含層削平
図版13	上城遺跡出土遺物 (土器・陶器・石器)

## 挿 図 目 次

第1図	土器復元作業	3
第2図	石器実測作業	3
第3図	位置と周辺の遺跡	5
第4図	堂田遺跡表採遺物	5
第5図	蟹沢遺跡第一次調査位置図	6
第6図	蟹沢遺跡グリッド設定図	7
第7図	蟹沢遺跡遠景・調査風景	8
第8図	蟹沢遺跡土層柱状図	9
第9図	上城遺跡第一次調査位置図	16
第10図	上城遺跡グリッド設定図	17
第11図	上城遺跡第二次調査範囲図	18
第12図	上城遺跡土層柱状図	19

## 表 目 次

第1表	蟹沢遺跡縄文土器・近世陶器観察表	15
第2表	蟹沢遺跡石器観察表	15
第3表	上城遺跡縄文土器・近世陶器観察表	21
第4表	上城遺跡石器観察表	21

# 第 I 章 序 説

## 1 調査に至る経緯

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北縦貫自動車道と連結、さらに会津若松市・新潟県東蒲原郡津川町を経て新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速道路である。太平洋側と日本海側の生活圏を直結させるこの高速道路は、沿線地域の産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割を担っている。

磐越自動車道のうち、蟹沢遺跡・上城遺跡にかかる区間（新潟～津川間）は、昭和53年12月に基本計画が決定され、昭和57年1月には建設大臣から日本道路公団新潟建設局（以下公団）に対し、調査開始指示が出された。これを受けて公団は、経済・地形・文化財等、工事の施工に必要な調査を開始した。

昭和59年8月、公団は県教育委員会に、新潟～津川間の計画路線内およびその周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を依頼してきた。県教育委員会はこれを受けて、同年10月周知の遺跡について分布調査を実施し、その結果を公団に回答した。またその折に、平野部や段丘上には未周知の遺跡が存在する可能性があり、今後とも分布および第一次調査を実施する必要性がある旨をつけ加えた。

昭和60年2月、建設大臣から公団に、新潟～津川間（約46km）の工事施工命令が出された。公団は、県教育委員会の分布調査結果を考慮し、赤坂山遺跡を含むいくつかの遺跡を法線から外す等、法線の再検討を加え、昭和60年3月に新津～安田間、同年11月に安田～津川間、翌年8月には新潟～新津間の最終的な路線を発表した。

県教育委員会は、公団から依頼を受けた安田～津川間の法線内全域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を昭和62年11月に実施し、堂田遺跡付近（蟹沢遺跡）・石間館跡付近（上城遺跡）を含む29地点について第一次調査の必要性と各地点の遺跡分布面積を公団に回答した。

平成2年4月の磐越自動車道調査工程に関する協議の決定に基づいて、県教育委員会は堂田遺跡付近（蟹沢遺跡）は平成3年5月下旬から6月上旬まで、石間館跡付近（上城遺跡）は平成3年5月から8月末日までの間に計2回の第一次調査を実施した。調査の結果、以上の2地点から縄文時代の遺構や遺物が検出され、第二次調査が必要であることが判明した。県教育委員会はその旨を公団に伝達するとともに、新発見であるこれら2遺跡について堂田遺跡付近は蟹沢遺跡、石間館跡付近は上城遺跡と改称し文化庁に遺跡発見通知を提出した。

公団と県教育委員会は調査工程の協議を重ね、蟹沢・上城両遺跡は平成5年度に第二次調査を実施することに決定した。なお、第二次調査の必要面積は、蟹沢遺跡が3,500㎡、上城遺跡が2,800㎡であり、県教育委員会から委託を受けた埋文事業団がこの調査にあたった。

## 2 調査体制と整理作業

発掘調査は県教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。蟹沢・上城の2遺跡が位置的に近接し、ほぼ同時期の遺跡であることや協議経過が重複することなどから、同一の体制で調査・整理作業を行った。

### A 調査体制

#### [第一次調査]

調査期間 平成3年5月27日～6月5日・8月19日～8月30日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

管 理 総 括 大嶋圭己（新潟県教育庁文化行政課長）

管 理 吉倉長幸（同 課長補佐）

庶 務 藤田守彦（同 主事）

調 査 調査指導 本間信昭（同 埋蔵文化財第二係長）

調査担当 北村 亮（同 主任）

調査職員 平澤秀昭（同 文化財主事）

#### [第二次調査]

##### 蟹沢遺跡

調査期間 平成5年7月26日～10月8日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 藤巻 正信（調査課第一係長）

調査担当 滝沢 規朗（同 専門員）

調査職員 横田 浩（同 専門員）

上田 順二（同 嘱託員）

##### 上城遺跡

調査期間 平成5年8月2日～10月7日

調査主体・調査等は蟹沢遺跡と同様である。

## B 整理作業および報告

平成5年12月上旬から3月中旬までの間、埋文事業団曾和分室（以下、曾和分室と略す）において、出土遺物の洗浄・註記・および図面等の基礎整理を上田（埋文事業団嘱託員）が行った。

本格的な整理作業は、平成6年11月下旬から曾和分室において、平成7年3月まで実施した。遺物の復元・実測・写真撮影・図版作成等、主要な作業は佐藤（埋文事業団主任調査員）を中心に埋文事業団職員がこれにあたった。

本報告書については、前述したように蟹沢・上城の両遺跡が位置的に近接していることや、協議経過・調査体制が重複することなどから合本とした。

期 間	平成6年11月28日～平成7年3月31日
主 体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
整理・報告	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）



第1図 土器復元作業



第2図 石器実測作業

## 第II章 遺跡の位置と環境

### 1 はじめに

本章では蟹沢遺跡・上城遺跡の地理的・歴史的環境を記すが、平成6年に報告書が刊行された三川村<sup>うへ</sup>上ノ平遺跡A地点や安田町萩野・官林遺跡とは地理的にも近接しており、内容が重複する部分が多い。このため詳細は磐越自動車道関係発掘調査報告書である『上ノ平遺跡A地点』[沢田ほか1994]・『萩野遺跡・官林遺跡』[亀井ほか1994]の第II章に譲りたい。ここでは前記の報告書内容とは重複をさげ、蟹沢遺跡・上城遺跡に関わる項目を中心に記す。

### 2 地理的・歴史的環境

#### A 地理的環境

遺跡は、阿賀野川によって作り出された緩やかな台地上（蟹沢遺跡は標高約47～52m、上城遺跡は標高53～58m）に立地している。阿賀野川から直線距離にして約1km北側に位置しており、河床との比高差は約20～25mである。遺跡の北側には宝珠山（標高559m）、菱ヶ岳（標高973m）、五頭山（標高912m）が、東側には笠菅山（標高609m）などが連なり、山地を形成している。また阿賀野川を挟んで南方には菅名岳（標高909m）があり、四方が1,000m級の山で囲まれている。

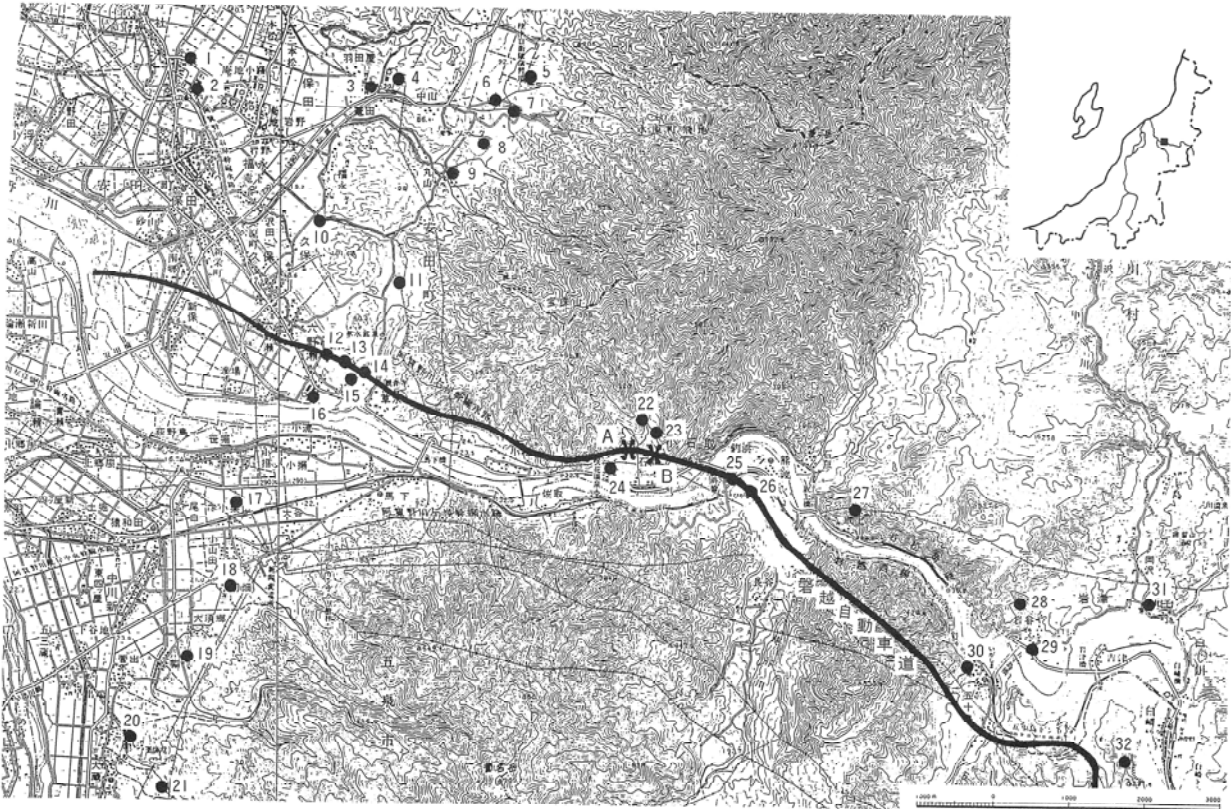
遺跡が立地する台地は、地形分類上は砂礫段丘（GTⅦ）にあたり、表層地質は礫・砂・粘土・泥岩で構成された第四紀古期段丘堆積物（gs5）にあたる[津田ほか1986]。発掘調査前の遺跡周辺は蟹沢遺跡が畑地・水田に、上城遺跡は畑地として利用されており、若干の地形の改変が行われていた。特に蟹沢遺跡では、遺物包含層や遺構にまで改変が及んでおり、残存状況は良好とはいえない。

#### B 歴史的環境

周辺の遺跡分布は、阿賀野川の河岸段丘・台地上に位置するもの、新潟平野に面した山地裾部に位置するものに分かれる。ここでは蟹沢遺跡・上城遺跡が立地する阿賀野川右岸の台地上の遺跡を中心に記す。

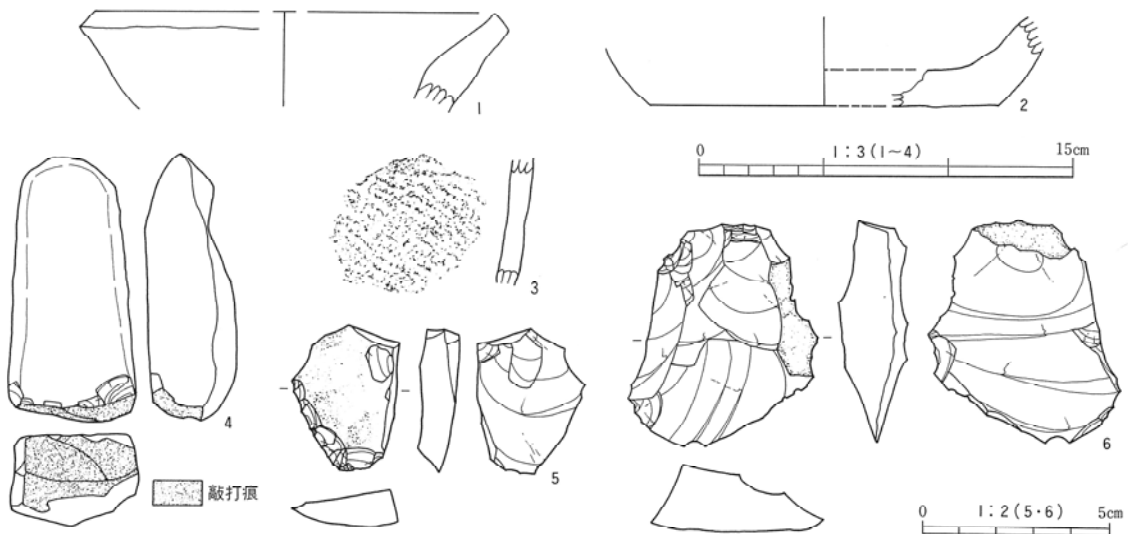
蟹沢遺跡の南側約200mには、縄文時代中期～晩期の遺物が表採されている堂田遺跡[本間ほか1962]がある。発掘調査は行われていないが、遺物から縄文時代後期を中心とした大集落の可能性がある。堂田遺跡は標高約35mで、阿賀野川とは直線距離にして300mしか離れておらず、河川が氾濫した場合には蟹沢遺跡と同様、少なからず影響を受けたものと考えられる。今回の調査結果の詳細は次章以降に譲るが、蟹沢遺跡は堂田遺跡とほぼ同様の内容であり、堂田遺跡の範囲内の可能性も否定し得ない。堂田遺跡の資料については、これまで公開されたものが少ないが、今回の調査時に表採した資料の一部を掲載した(第4図参照)。第4図1～3は縄文土器で、1は「く」の字に外反する無文の口縁部片、2はRL縄文が施される胴部片、3は底部片である。4～6は石器で、4は敲石、5は正面下端から左側縁にかけて二次加工が施される不定形石器、6が縦長剝片である。石材は4が砂岩、5が鉄石英、6が凝灰岩である。

縄文時代の遺跡は、この他に蟹沢遺跡の北方に位置する大平遺跡以外に、現状では確認されていない。上城遺跡の北方には中世の石間館跡が存在するに過ぎない。石間館跡は中世後期の会津芦名氏の家臣小田切一族のもので、小田切弾正・小田切豊前が城主であったと伝えられている。



遺跡名	時期	遺跡名	時期	遺跡名	時期	遺跡名	時期
1 藤堂	縄文(中・後期)	10 山の下	弥生(中期)	19 幅	縄文(中期)	28 岩谷館跡	中世
2 大曲	弥生(中期)	11 野中	縄文(中・後期)	20 薬師平	縄文(中期)	29 西岩谷	縄文(後期)
3 家添	縄文	12 萩野	縄文(中・後期)	21 大蔵	縄文(中・後期)	30 五十島	縄文(中期)
4 石仏山	旧石器	13 官林	縄文(中期)	22 大平	縄文~弥生	31 岩宮洞窟	縄文(中・晩期)・弥生
5 大日ヶ原II	縄文(中期)	14 赤坂山B	縄文(中・晩期)	23 石間館跡	中世	32 砥石山	縄文
6 滝山	中世	15 赤坂山	縄文(中・晩期)	24 堂田	縄文(中・晩期)	A 蟹沢	縄文(後期)
7 日陰平	縄文	16 六野瀬	縄文(中期)~平安	25 吉ヶ沢	旧石器・縄文	B 上城	縄文(後期)
8 ツベタ	縄文(中・後期)	17 小栗山	縄文(中期)	26 上ノ平	旧石器・縄文		
9 虚空蔵山	縄文	18 切畑	縄文(前期)	27 取上城跡	中世		

第3図 位置と周辺の遺跡 国土地理院発行 1:50,000「新津」・「津川」平成3・4年



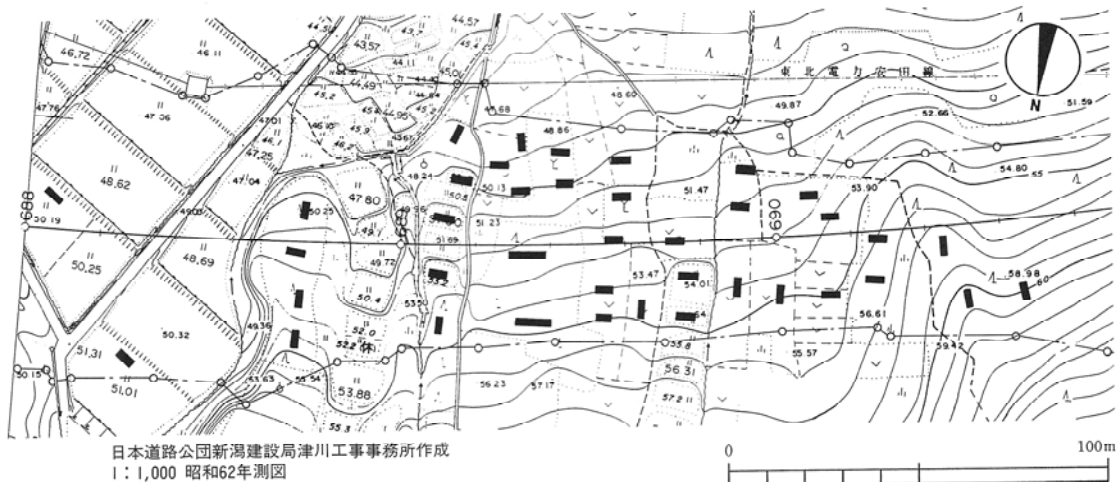
第4図 堂田遺跡表採遺物

# 第Ⅲ章 蟹 沢 遺 跡

## 1 第一次調査 (第5図)

第一次調査は県教育委員会が平成3年5月27日から6月5日の間に、上城遺跡と併せて実施した。この時点では蟹沢遺跡・上城遺跡の範囲が不明であったため、三川村大字小石取字蟹沢および上城地内の磐越自動車道法線内を対象に、2m×5m程度のトレンチを計105か所設定し、遺物・遺構の有無、土層堆積状況を確認した。トレンチの総面積は1,160㎡で、調査対象面積26,500㎡に占める割合は約4.4%であった。

蟹沢地内では、遺構として土坑およびピットと思われるものがそれぞれ1基ずつ検出された。また、遺物は縄文土器片および磨石と思われる礫が出土しており、第二次調査を実施する必要性が生じた。遺物・遺構の検出状況から、蟹沢遺跡の第二次調査必要範囲をセンター杭No.689付近からNo.690付近の間で、センターから南側の部分3,500㎡とした。



第5図 蟹沢遺跡第一次調査位置図

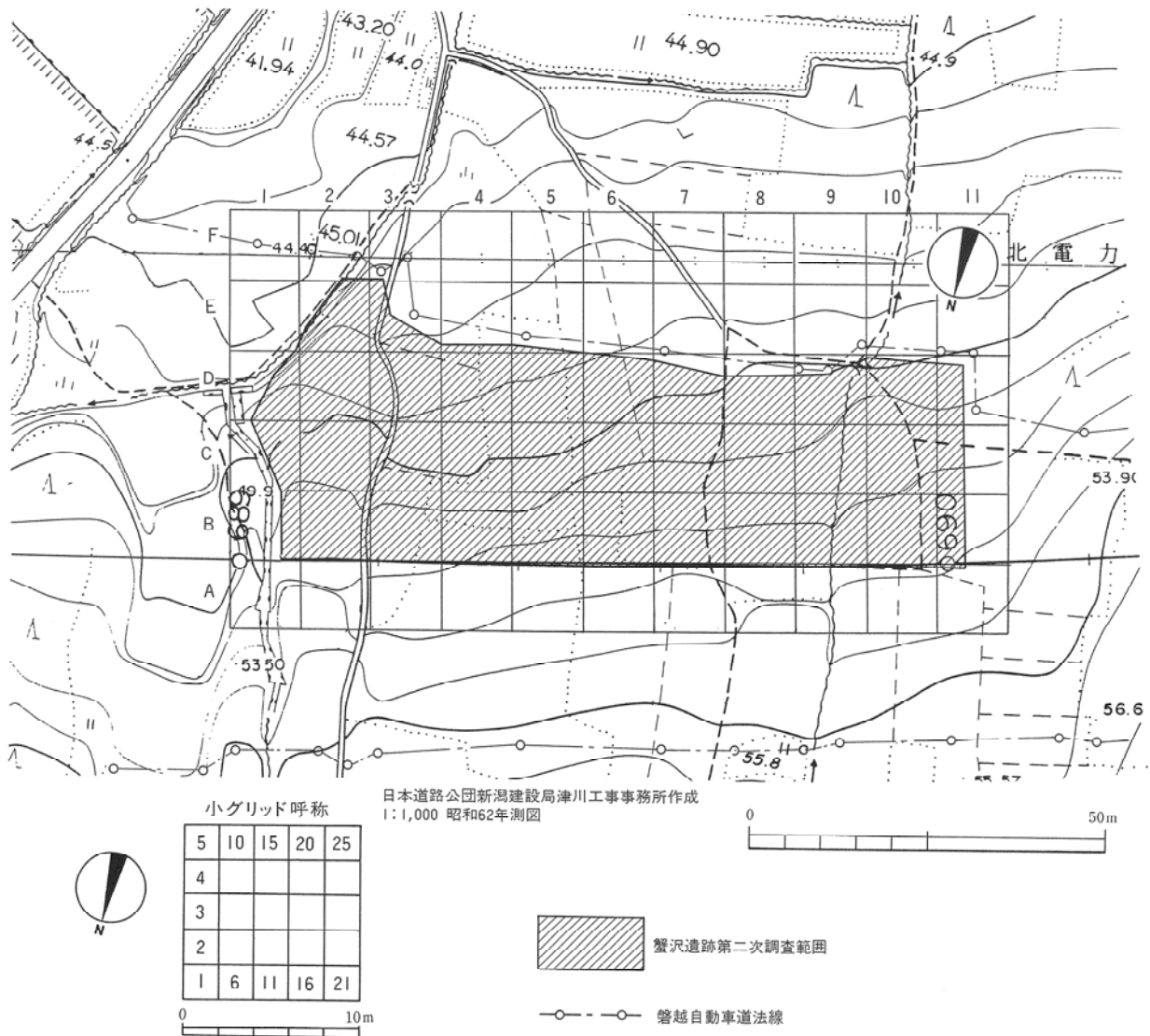
## 2 第二次調査

### A 調査方法

#### 1) 調査区の現況

蟹沢遺跡は阿賀野川右岸の、標高約50mの台地上に位置する。遺跡は北西から南東に緩やかに傾斜しており、現況は畑地である。遺跡の北側は急傾斜の丘陵で山林となっている。この山林の両側は階段状に開墾された水田である。





第6図 蟹沢遺跡グリッド設定図

## 2) グリッドの設定 (第6図)

調査の合理性を考慮し、磐越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とする方法をとった。センター杭No.689 (X=193,126.9062、Y=70,752.0019) とセンター杭No.690 (X=193,117.5046、Y=70,652.4634) を結ぶ方向を長軸方向とし、10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このためグリッドの長軸方向は真東から14度30分北偏している。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に分割して1~25の小グリッドとし、3C-2のように表示した

## 3) 調査方法

調査の基本工程は、基本層序の確認、包含層の掘削、遺構精査・発掘である。

**基本層序の確認** 調査区を横断するように幅約50cmのトレンチを設定し、人力で掘削した後、層序を把握

## 2 第二次調査

した。層序は、任意に数か所の場所を選び、幅1m程実測した。

**包含層の掘削** 基本層序の確認結果から、表土(10~20cm)は重機(バックホー)により除去した。包含層の掘削は人力で行い、排土はベルト・コンベアーで調査区域外へ搬出した。包含層出土遺物は、小グリッド毎に取り上げた。

**遺構精査・発掘** 包含層掘削後、遺構精査を行った。検出された遺構はセクションベルトを残して掘るか、半截した後、土層断面の写真撮影および縮尺1/20の断面図を作成した。遺構の平面実測は、縮尺1/20の簡易遣り方で行い、併せて完掘写真も撮影した。調査区の全体図は1/100の縮尺で作成した。

### B 調査経過

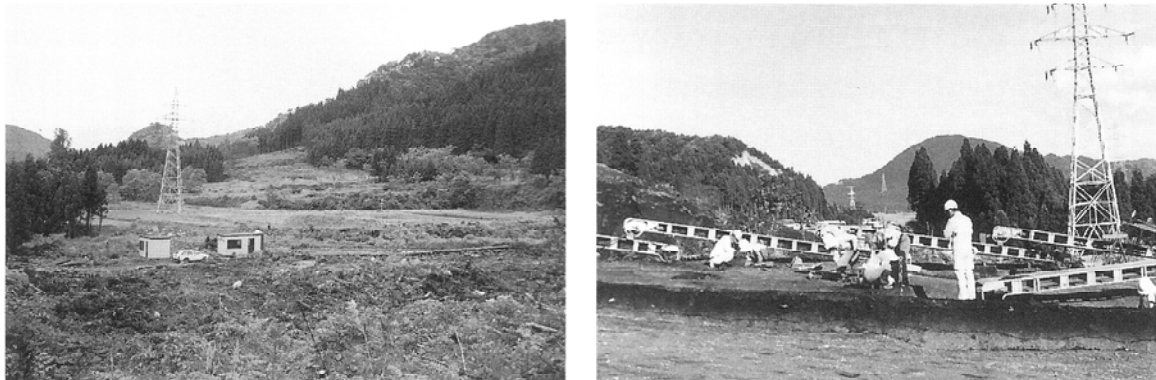
蟹沢遺跡と上城遺跡の発掘調査は、平成5年7月26日から平成5年10月8日までの期間で実施した。調査は基本的に調査員3人、作業員約20名の編成で行った。調査面積は蟹沢遺跡が3,500㎡、上城遺跡が2,800㎡である。

当初の調査計画では、蟹沢遺跡の調査終了後、上城遺跡の調査にかかる予定であった。しかし、上城遺跡の包含層の最深部が、地表から約3mの位置まで達していることを検討した結果、調査が長期間にわたる可能性もあることから、蟹沢遺跡の調査に並行して上城遺跡の調査も実施することになった。上城遺跡の調査開始は8月2日からである。蟹沢遺跡の調査経過は次の通りである。

7月26日には、現場事務所・トイレの設置および器材の搬入等の諸準備を行った。重機による調査区全体の表土剥ぎは、同26日から5日間実施した。8月2日からは作業員20人が発掘現場入りし、本格的な調査となった。

調査は排土処理等の都合で、調査区の西側(大グリッド11区)から東側(大グリッド1区)へと掘り進めることにした。包含層掘削は基本的には人力によるものであるが、大グリッド11区から大グリッド8区付近までは、出土遺物が希薄なことや包含層の堆積が厚い(50~100cm)ことなどから、一部重機による掘削も併せて実施した。

9月29日に、調査区全体の包含層掘削が終了し、9月30日からは遺構精査および遺構発掘、遺構実測、写真撮影等を実施した。10月5日に完掘全景写真を撮影し、8日には後片づけも全て終了し、現場事務所を撤収した。



第7図 蟹沢遺跡(左:遠景、右:調査風景)

### 3 層序 (第8図、図版8)

蟹沢遺跡は、上の沢川と下の沢川に挟まれた台地上に立地し、東西約100m、南北約40mの範囲で、北西から南東へ緩く傾斜している。当遺跡の現況は畑地であるが、戦前まで杉林であったため、戦後の開墾時およびその後の耕作によって、かなり大きく削平を受けていると推察できた。

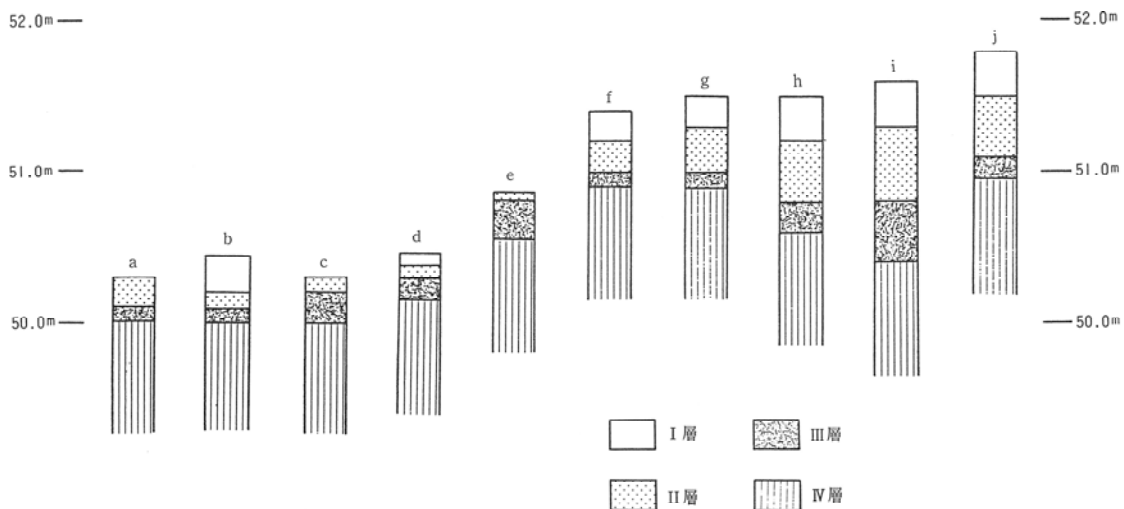
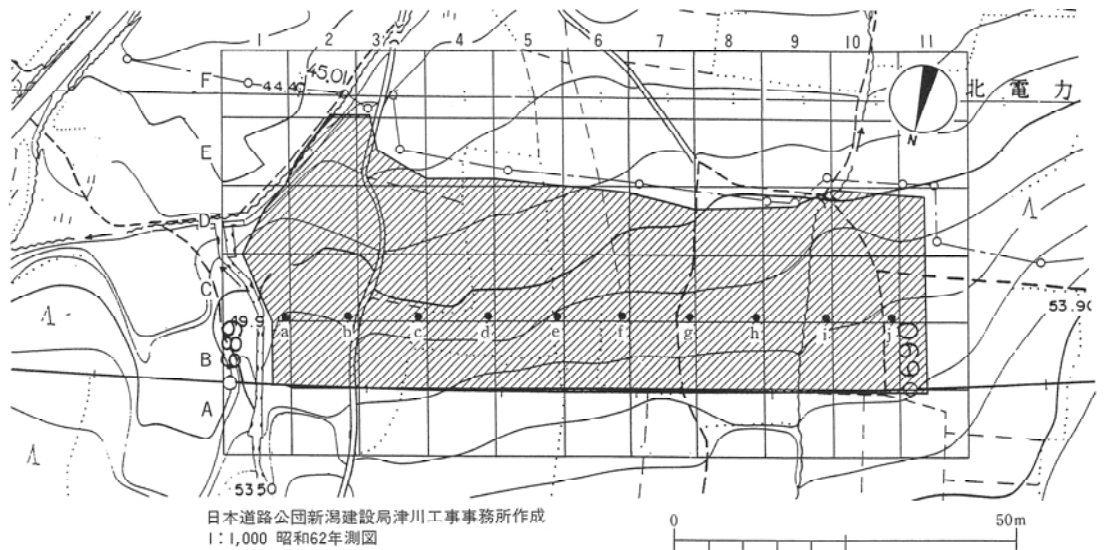
基本層序は、明確に分離されるⅠ～Ⅳ層であり、特に細分を要しない。(第8図) 調査区内では土層の厚み・色調などに変化はあるものの、Ⅰ～Ⅳ層は全域にはほぼ共通して堆積している。

Ⅰ層 現畑耕作上で暗褐色土である。

Ⅱ層 黒褐色を呈する縄文時代の包含層である。平均的な厚さは20～40cmである。検出された2基の埋設土器はこのⅡ層を切り込んで構築されていた。

Ⅲ層 暗黄褐色土で、Ⅳ層の漸移層である。平均的な厚さは10～20cmである。検出された2基の土坑はこのⅢ層を掘り込んで構築されており、その下部はⅣ層まで達していた。

Ⅳ層 黄褐色土を基本とする地山であり、この上面を最終的な遺構確認面とした。



第8図 蟹沢遺跡土層柱状図

## 4 遺構各説

蟹沢遺跡で検出された遺構は、わずかに土坑2基、埋設土器2基、竪穴状遺構2基があるに過ぎない。いずれも、調査区の南東部に位置している。埋設土器は、2基とも欠損部が多く、残存状況は不良である。そのうち、2号埋設土器は口縁部および体部半身を欠いている。竪穴状遺構としたものは、竪穴住居に類似する楕円形の落ち込みである。柱穴・炉などの施設がないこと、また、掘形からも竪穴住居とは断定しがたく、上記の名称を使用した。

遺構内および包含層からの出土遺物は、縄文時代後期の土器・石器がほとんどであり、上記の遺構も当該時期の所産のものが大半であろうと推測される。

以下、遺構種別毎に説明する。

### A 土坑 (図版2・7)

#### 1号土坑

調査区北東部のB2-23グリッドで検出された。土坑は、基本層序Ⅲ層の暗黄褐色土から掘り込まれ、その下部は基本層序Ⅳ層(地山)の黄褐色土に至る。平面は楕円形で、長径は144cm、短径は94cmである。断面は皿状で、深さ23cmである。覆土は4層に分けられ、いずれも粘性をもち、しまりがある。微量の炭化粒を含む。出土遺物はなく、時期の特定はできない。

#### 2号土坑

調査区東部のC2-3グリッドで検出された。土坑は、第Ⅲ層の暗黄褐色土から掘り込まれ、その下部は地山の黄褐色土に至る。平面は長楕円形を呈し、長径232cm、短径86cmである。断面は皿状で、底部は凹凸があり、深さは50cmである。覆土は4層に分けられ、いずれも粘性をもち、しまりがある。少量のローム粒を含む。出土遺物はなく時期は確定できない。

### B 埋設土器 (図版2・7)

#### 1号埋設土器

調査区南東部D4-19グリッドから検出された。確認面は基本層序のⅡ層で、底部はⅣ層の地山を10cm程くい込んでいる。掘形の平面は円に近い楕円形を呈し、長径38cm、短径30cm、深さ41cmである。断面は筒状で、坑底は平坦である。覆土は単層で黒褐色を呈し、やや粘性をもつがしまりに欠ける。埋設土器は縄文時代後期の深鉢である。検出時には口縁部ならびに体部上半が欠損しており、全体の形状をとどめていなかった。遺構内からは埋設土器以外の遺物は出土しておらず、土器型式から縄文時代後期の所産と考えられる。

#### 2号埋設土器

調査区南東部のE2-11グリッドから検出された。6m東には2号竪穴状遺構がある。確認面はⅡ層であり、掘形の平面はほぼ円形で、長径27cm、短径26cm、深さ25cmである。断面は筒状で坑底は平坦である。覆土は単層で暗褐色を呈し、粘性・しまりに欠ける。埋設土器は縄文時代後期の深鉢であるが、残存状況は劣悪で、胴部の一部を除いてすべて欠損している。遺構内からは埋設土器以外の遺物は出土しておらず、土器型式から縄文時代後期の所産と考えられる。

## C 竪穴状遺構（図版2・8）

### 1号竪穴状遺構

調査区最東端で検出され、4m北には2号土坑がある。平面形は中央部の狭い楕円形を呈し、長径546cm、短径300cmである。断面は皿状で、深さは40cmを測る。坑底は平坦であり覆土は3層に分けられる。いずれも粘性があり、1・2層はしまりがあり、炭化粒を含む。3層は多量のローム粒を含む。遺構内から土器片数点と剥片1点が出土した。縄文時代後期と思われる土器片が1点出土しており、同時期の所産と考えられるが、確定できない。

### 2号竪穴状遺構

調査区南東端で検出され、10m北に1号竪穴状遺構がある。遺構の約半分は調査区外（沢縁）のため、全体を把握することは不可能であった。平面形は隅丸方形を呈すると思われ、一辺は420cmを測る。断面は皿状で深さは20cmである。覆土は2層に分けられ、ともに粘性をもちしまりがある。遺構内からは縄文時代後期の土器片が数点出土しており、同時期の所産と考えられる。

## 5 出土遺物

蟹沢遺跡の出土遺物は、縄文時代後期のものが大半を占めており、他の時代の遺物は少量で細片である。また、遺物総量もきわめて少なく、整理箱（54×34×10cm）で約3箱であった。土器の整理は袋毎に洗浄・註記を行い、遺構・グリッド毎にまとめて接合した。図化可能なものはできるだけ実測し、遺構・包含層出土遺物は全て一括して掲載・記述することにした。

### A 土器・陶器（図版3・4・9・10）

前述したように、縄文時代後期に属する土器が大半で、他には縄文時代中期の土器片、近世の陶器が少量出土した。出土土器のほとんどは中・小破片のため、全体の器形や文様構成を推定できるものは少ない。また、遺物は調査区中央からの出土は希薄で、東西両端からの出土が多い。以下、所属時期と器種別に分類して報告する。

#### 1) 縄文時代中期前葉の土器（1・2）

縄文時代中期前葉に含まれる土器が2点出土した。1は、半截竹管で横位に施文された深鉢形土器の口縁部付近の破片と思われる。外面には炭化物の付着が認められる。2は、三角形の陰刻が認められ、その陰刻の周辺はV字状に、他の部分は縦位に細く浅めの半隆起線文が施文されている。2片とも細片のため、全体の器形は不明である。

#### 2) 縄文時代後期前葉の土器（3～21）

3～7は、堀之内I式に併行するいわゆる縁帯文系の南三十稲場式土器である。3～5は同一個体で、全体の器形は根立遺跡出土土器〔中村1975〕に類似した胴長の深鉢と思われる。口縁部は外側に肥厚し、三段の横状隆帯文を巡らし、隆帯間には幅1.3cm前後の凹帯部分をつくり、そこには縦位短沈線文を施してある。口縁部上部には、斜位沈線文が平行に施文されている。口縁部から胴部下半にかけて幅2.5mm、

深さ2mm前後の4本の密接した沈線文が櫛歯状工具でX状に垂下している。4と5は胴部下半の近接する部分と思われるが、外面には炭化物の付着が著しい。6は胴部の最もくびれた部分の土器片であるが、胎土や焼成から3～5とは別個体である。器形・文様等は酷似している。7は体部片であるが、縦位の束状沈線文の区画外に単節縄文(LR)が施文されている。8は小波状を呈する深鉢形土器の口縁部片である。波状部は、口縁全体では4単位に配されると思われる。口縁端部は肥厚し、その端面に一条の凹線を施している。器面は無文で、ナデによる砂粒の移動が顕著である。埋設土器の9は、本遺跡出土土器の中で唯一全体の器形が把握できるまでに復元できたもので、水平口縁を有する深鉢形土器である。底部は揚げ底形を呈し、胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや内湾する。器面には、口縁部から底部付近まで単節縄文(LR)が施されている。10～15は、水平口縁を有する深鉢形土器の口縁部片である。口縁部の形態は、やや内湾して立ち上がる10以外は、全て直立する。14は、口縁の内側がナデ調整を受けており、丸みを帯びる。10～12は、単節縄文(LR)を地文とし、13は撚りもどし縄文(LL)が施文されている。14・15については、縄文が施文されていた可能性が高いが器面が著しく荒れているので、明確には確認できない。16～21は深鉢形土器の体部片であるが、16・17は、胎土や形態、さらには出土地点から同一個体と考えられるが、無文の体部片である。器面は、細い棒状の工具で横位にナデ調整が施されている。16の外面・17の内面には炭化物の付着が認められる。18・19は、粗製土器の体部片であり、単節縄文(LR)が施されている。埋設土器の18は、残存度が極めて劣悪で全体の器形は不明である。土器の内外面ともに炭化物の付着が認められ(特に内面の付着が著しい)、19の外面にも同様の炭化物が付着している。20は、縦位条線が施され、外面には炭化物の付着も認められる。21は、乱雑で浅い条線を地文とし、半截竹管による刺突文が帯状に施されている。

### 3) 縄文時代後期中葉から後葉の土器

#### 深鉢形土器 (22)

22は、県内では三仏生式と称せられる土器の口縁部片である。器形は、底部から外反して立ち上がり、口縁が開く形態と思われる。口縁は波状を呈するが、何単位かは不明である。口縁部から頸部までは無文帯であり、ミガキ調整が内外面ともに施されている。頸部には1本の横位沈線が観察できる。

#### 鉢形土器 (23～27)

23は、水平口縁を有する鉢形土器の口縁部片と思われる。口縁の内側はナデ調整を受けており丸みを帯びる。無文の土器で、細かい砂粒を多く含み色調は黄桃色を呈する。24は胴部が内湾し、全体的に丸みをもった器形の鉢形土器と思われる。3条の横位沈線区画内は単節縄文(LR)が2条に施され、区画外は磨消されており、縄文帯と無文帯を交互に配置する。上部の縄文帯部には単位は不明であるが、縦スリットを施した瘤状の小突起が付される。注口部は確認できないが、注口土器の可能性もある。25は、胴部下半から底部付近の破片と思われるが、全体の器形は不明である。胴部は丸みを持って半球状を呈し、単節縄文(LR)が地文として施されている。26は胴部と思われるが、細片のため全体の器形は不明である。文様は3条の横位沈線を巡らし、器面が著しく荒れているため明瞭ではないが沈線間には縄文が充填されているようである。27は、底部から内湾しながら立ち上がる半球形に近い鉢形土器の口縁部片と思われる。口縁部下には2本の横位沈線を巡らせ、その沈線区画内には細縄文(LR)が施文されている。口縁から縄文帯までは無文であり、縄文帯から下部も器面が荒れていて明瞭ではないが無文と判断される。

## 浅鉢形土器 (28・29)

28は、胴部片と思われるが全体の器形は不明である。胎土は緻密であり、内面はミガキ調整が施されている。外面はかなり磨耗しているため明瞭ではないが、縄文が施文されているようである。29は、外傾して立ち上がるとと思われる鉢形土器の口縁部片である。外面は無文で、胎土には砂粒が目立つ。内面は丁寧なミガキ調整が施され、口縁部下には3本の横位沈線が平行に巡る。

## 壺形土器 (30)

30は、壺形土器の頸部のくびれ部から胴部にかけての細片と思われるが、口縁部が外反しロート状を呈するのか、ほぼ直立気味に立ち上がるのかは確認できない。文様は、沈線区画された横位の縄文帯と磨消しによる無文帯が交互に巡らせてある。

## 注口土器 (31~33)

31~33は同一個体であり、ともに胴部片である。胴部はソロバン玉的な扁球形を呈すると思われるが、頸部から上部の形態は不明である。体部には弧状沈線が施され、底部付近は無文である。外面はナデ調整が施され、胎土には細かい砂粒が目立つ。

## 4) 縄文時代の深鉢形土器底部 (34~43)

本遺跡では、底部片が10点出土しており、全てが縄文時代の深鉢形土器の底部と思われるが、時期の詳細は不明である。底部がほぼ水平になる形態のものは34と35の2点のみで、他は底部外面の中央部が少し浮く形態のいわゆる揚げ底形を呈する。42・43の底部外面には、網代圧痕が認められる。また、34と36・42の内面、35の外面には炭化物の付着も確認される。

## 5) 近世陶器 (44・45)

近世陶器の挿鉢の破片が2点出土している。44は、素地が暗赤色で口縁部の内外面に鉄釉がかけられている。体部はロクロナデ調整が施されており、内部の櫛目は10本を超えるが破片のため正確な本数や単位は不明である。45は、素地が暗赤褐色を呈し、無釉で堅く焼き締められている。外面はロクロナデ調整が施されており、内面には14本を1単位とする櫛目が認められるが、その単位数は不明である。

## B 石器 (図版5・11)

蟹沢遺跡から出土した石器・剥片類はわずかに11点に過ぎない。このうち、明確に石器と判断できるものは6点である。内訳は、打製石斧1点、磨製石斧1点、磨製石斧の未成品1点、剥片2点、砥石1点、その他として何らかの目的で遺跡に搬入されたと推定される礫が5点である。石器の出土状況は調査区南東端からの出土が11点中7点とやや多い。

石器は遺構内から2点ほど出土しているが、大半は包含層からの出土で、伴出する土器の多くが縄文時代後期に属することから、石器も同時期の所産のものが多いと考えられる。

以下、器種ごとに説明する。

## 1) 打製石斧 (46)

平面形態は刃部が凸状に尖る短冊形で、刃部の形態は両刃の偏円刃である。使用痕は、刃部正裏面が著

しく磨耗しており、右側縁にツブシが観察される。石材は頁岩であり、2号竪穴状遺構（E2-1地点）からの出土である。

## 2) 磨製石斧 (47)

基部が大きく折損しているため、全体の平面形態は把握できないが、刃部の断面が隅丸長方形を呈する定角式磨製石斧である。刃部形態は両刃の円刃である。残存部の正裏面および側面全体が研磨により調整されている。使用痕としては、刃部の正裏面に磨耗がみられ、微細剝離も観察される。石材は安山岩であり、出土はB5-8地点である。

## 3) 磨製石斧の未成品 (48)

刃部が大きく折損しているが、いわゆる乳棒状磨製石斧の未成品と推定される。裏面に自然面を残す部分も認められるが、研磨調整前の敲打がほぼ全面に残る。磨製石斧製作途中で、刃部が折損した可能性が高い。石材は輝緑岩で、E4-16地点から出土している。

## 4) 砥石 (49)

厚さが4mmと薄く、砥面が平坦な砥石であり、正裏面ともに使用痕が確認される。砥面は光沢を帯びており、線条痕も認められる。破片のため詳細については不明であるが、近世以降の板状砥石と考えられる。石材は粘板岩である。

## 5) 剥片 (50・51)

二次加工の認められない剥片が2点出土している。50は、1号竪穴状遺構（D1-21地点）から出土し、石材は緑色凝灰岩である。打面は平坦で、剝離は正裏面とも打面から下方向に伸びている。正面の下部縁辺部に自然面をもち、使用痕は認められない。51は、縦長の剥片であり、50同様使用痕は認められない。打面は自然面で、剝離は正裏面とも打面から下方向に伸びている。石材は頁岩で、正面の下半部に自然面が残存している。E2-12地点からの出土である。

## 6) その他 (52~56)

使用痕らしき部分も有するが、明確に使用痕として判断できないためその他として扱うことにした礫が5点出土した。54は裏面、55は正裏面に磨痕と思われる部分を有し、磨石の可能性もある。石材は54は花崗岩であり、55は安山岩である。56は下端に敲打痕らしき痕跡を残しているが、敲石かどうかは不明である。石材は安山岩である。52・53は、磨石と敲石の機能を複合した石器の可能性もあるが、定かではない。52は右側縁に磨痕、下端に敲打痕らしき部分を有する。石材は花崗岩である。53は正面に磨痕、両側面と上下端に凹凸の大きな敲打痕らしき部分を有する。石材は同じく花崗岩である。



第1表 蟹沢遺跡縄文土器・近世陶器観察表

質量( )内は現存値を示す

No.	器種	出土地点	質量 (cm)			遺存部位	色調	文様・他
			口径	底径	器高			
1	深鉢	C 9-12	—	—	(1.8)	口縁下部	灰褐色	隆位半隆起線文、外面炭化物
2	深鉢	D 1-25	—	—	(2.6)	頸部?	灰褐色	三角形陰刻、半隆起線文
3	深鉢	C 10-17	28.0	—	(7.7)	口縁部	浅黄橙色	同一個体、口縁部斜位沈線、3段の横状隆帯文、横帯間縦位短沈線、頸部から胴部4本を1単位とするX状の縦位沈線文、外面炭化物、南三十稲場式
4	深鉢	C 10-22	—	—	(8.7)	胴部下半	浅黄橙色	
5	深鉢	C 10-17	—	—	(6.2)	胴部下半	浅黄橙色	
6	深鉢	C 10-16	—	—	(8.9)	胴部	灰褐色	南三十稲場式4本を1単位とするX状の縦位沈線文
7	深鉢	C 9-13	—	—	(2.8)	胴部	灰褐色	南三十稲場式、縦位束状沈線文、区画外単節縄文(LR)
8	深鉢	C 9-8	14.0	—	(3.4)	口縁部	灰白色	4単位?小波状口縁、口唇端面凹線、無文
9	深鉢	1号埋設	23.0	8.3	35.1	完形	灰褐色	地文単節縄文(LR)
10	深鉢	E 2-11	—	—	(4.7)	口縁部	灰褐色	地文単節縄文(LR)
11	深鉢	2号堅穴状遺構	—	—	(4.5)	口縁部	灰白色	地文単節縄文(LR)
12	深鉢	E 3-3	—	—	(5.0)	口縁部	灰白色	地文単節縄文(LR)
13	深鉢	D 2-24	—	—	(5.7)	口縁部	灰褐色	地文撚りもどし縄文(LL)
14	深鉢	C 9-13	—	—	(4.5)	口縁部	赤褐色	地文縄文?
15	深鉢	D 2~E 2	—	—	(1.8)	口縁部	灰褐色	地文縄文?
16	深鉢	2号堅穴状遺構	—	—	(4.4)	胴部	赤褐色	無文、外面ナデ調整、外面炭化物
17	深鉢	2号堅穴状遺構	—	—	(4.0)	胴部	赤褐色	16と同一個体、無文、外面ナデ調整、内面炭化物
18	深鉢	2号埋設土器	—	—	(11.7)	胴部	暗褐色	地文単節縄文(LR)、内外面炭化物
19	深鉢	1号堅穴状遺構	—	—	(3.3)	胴部	灰褐色	地文単節縄文(LR)、内外面炭化物
20	深鉢	C 10-16	—	—	(7.7)	胴部	灰褐色	縦位条線、外面炭化物
21	深鉢	B 5-13	—	—	(4.9)	胴部	灰白色	乱雑で浅い沈線文、半截竹管による刺突文
22	深鉢	C9-6他	—	—	(7.1)	口縁部	灰白色	三仏生式、波状口縁部無文、内外面ミガキ調整、頸部横位沈線
23	鉢	D 1-16	—	—	(2.8)	口縁部	橙色	無文、細砂粒目立つ
24	鉢?	2号堅穴状遺構	—	—	(8.8)	胴部	灰褐色	堀之内2式、交互に縄文帯と無文帯、胴部に貼瘤
25	鉢	2号堅穴状遺構	—	—	(4.5)	胴部下半	灰褐色	地文単節縄文(LR)
26	鉢?	C 9-16	—	—	(2.8)	胴部	灰白色	3条の横位沈線区画内単節縄文(LR)充填
27	鉢	2号堅穴状遺構	—	—	(3.0)	口縁部	灰褐色	2条の横位沈線区画内単節縄文(LR)充填
28	浅鉢	C 9-18	—	—	(2.5)	胴部	灰白色	縄文?内面ミガキ調整
29	浅鉢	C 9-11	—	—	(2.8)	口縁部	灰褐色	外面無文、内面ミガキ調整と横位沈線文
30	壺	C 9-9	—	—	(3.6)	胴部上半	灰褐色	交互に縄文帯と無文帯
31	注口	2号堅穴状遺構	—	—	(1.2)	胴部上半	灰白色	弧状沈線、外面ナデ調整
32	注口	2号堅穴状遺構	—	—	(1.7)	胴部上半	灰白色	弧状沈線、外面ナデ調整、31と同一個体
33	注口	2号堅穴状遺構	—	—	(2.7)	胴部下半	灰白色	無文、外面ナデ調整、31・32と同一個体
34	深鉢	2号堅穴状遺構	—	6.6	(3.4)	底部	暗褐色	無文、内面炭化物
35	深鉢	C 9-4	—	7.2	(3.2)	底部	灰白色	無文、外面炭化物
36	深鉢	1号堅穴状遺構	—	9.0	(2.8)	底部	浅黄橙色	無文、内面炭化物
37	深鉢	表採	—	9.2	(2.6)	底部	灰白色	無文
38	深鉢	C 10-1他	—	9.0	(1.7)	底部	灰褐色	無文
39	深鉢	2号堅穴状遺構	—	9.4	(3.1)	底部	浅黄橙色	無文
40	深鉢	D 2他	—	9.6	(2.1)	底部	赤褐色	無文
41	深鉢	C 11-1他	—	13.4	(4.7)	底部	浅黄橙色	無文
42	深鉢	1号堅穴状遺構	—	11.0	(0.9)	底部	赤褐色	底面網代圧痕
43	深鉢	C 2-9	—	10.4	(2.3)	底部	灰白色	底面網代圧痕
44	搦鉢	C 3-16	28.0	—	(3.8)	口縁部	暗赤色	口縁部内外面鉄釉、ロクロナデ調整、内面櫛目の単位不明
45	搦鉢	表採	—	—	(5.6)	胴部下半	暗赤褐色	無釉で焼締、ロクロナデ調整、内面14本を1単位とする櫛目

第2表 蟹沢遺跡石器観察表

( )内は現存値を示す

No.	器種	出土位置	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石材	備考
46	打製石斧	2号堅穴状遺構	13.5	6.2	4.0	336	頁岩	完形、偏円刃、両刃
47	磨製石斧	B 5-8	(6.5)	5.1	2.9	(104)	安山岩	基部折損、両刃、円刃
48	磨製石斧の未成品	E 4-16	(8.1)	(4.2)	2.8	(102)	輝緑岩	刃部折損
49	砥石	不明	4.5	4.0	0.4	11	粘板岩	近世以降の板状砥石?
50	剥片	1号堅穴状遺構	4.6	4.8	1.2	12	緑色凝灰岩	
51	剥片	E 2-12	5.6	3.8	1.6	17	頁岩	
52	搬入礫	E 2-19	13.7	5.1	4.3	440	花崗岩	磨石? 敲石?
53	搬入礫	E 3-4	25.0	21.5	4.0	3320	花崗岩	磨石? 敲石?
54	搬入礫	E 3-5	15.7	9.5	4.6	1000	花崗岩	磨石?
55	搬入礫	表採	9.8	9.1	4.9	590	安山岩	磨石?
56	搬入礫	B 6-18	8.1	4.7	3.1	180	安山岩	磨石?

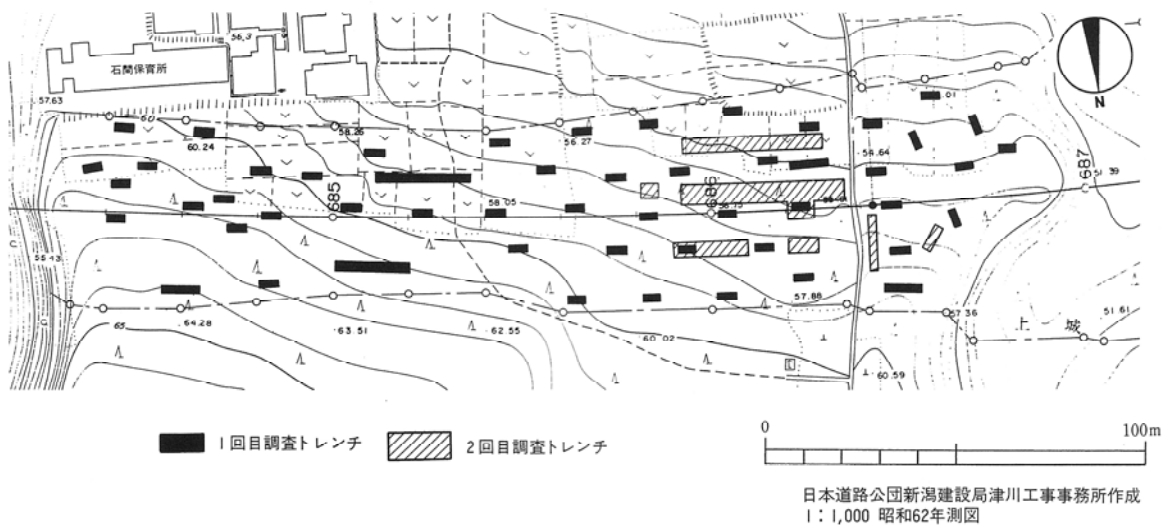
## 第Ⅳ章 上城遺跡

### 1 第一次調査（第9図）

第一次調査は県教育委員会が平成3年5月27日から6月5日の間に、蟹沢遺跡と併せて実施した。調査方法については、第三章1で記述しているのでここでは省略する。この調査の結果、上城地内ではセンター杭No.685+20m付近からNo.686+20m付近にかけて地山が落ち込んでおり、地山までの最深度が約2.5m程あった。表土層下には黒色腐植土（砂利混り）と山砂の互層が厚く堆積しており、この付近が埋没谷の一部であることが判明した。遺構は検出されなかったが、縄文土器と不定形石器が出土した。しかし、いずれの出土層位も安定した遺物包含層としては捉えられず、谷上流部からの流れ込みとも考えられ、当該地区の性格や遺跡の有無を明らかにすることはできなかった。

そこで、県教育委員会は平成3年8月19日から8月30日の間に、2回目の第一次調査を実施した。1回目の調査トレンチの間を補うように約2mから4m幅のトレンチを合計7か所設定し、遺構・遺物等を再度確認した。この調査の結果、土坑と思われるものが数基と細片ではあるが縄文土器片が200点近く検出され、また遺物包含層が2枚存在することも明らかになり、第二次調査の必要が生じた。第一次調査面積は1回目と2回目を合計すると660㎡あり、再調査が必要と判断された約3,600㎡の18.3%であった。

2度にわたる第一次調査の結果、上城遺跡第二次調査必要範囲をセンター杭No.685+80mからNo.686+40m付近の2,800㎡と決定した。



第9図 上城遺跡第一次調査位置図

## 2 第二次調査

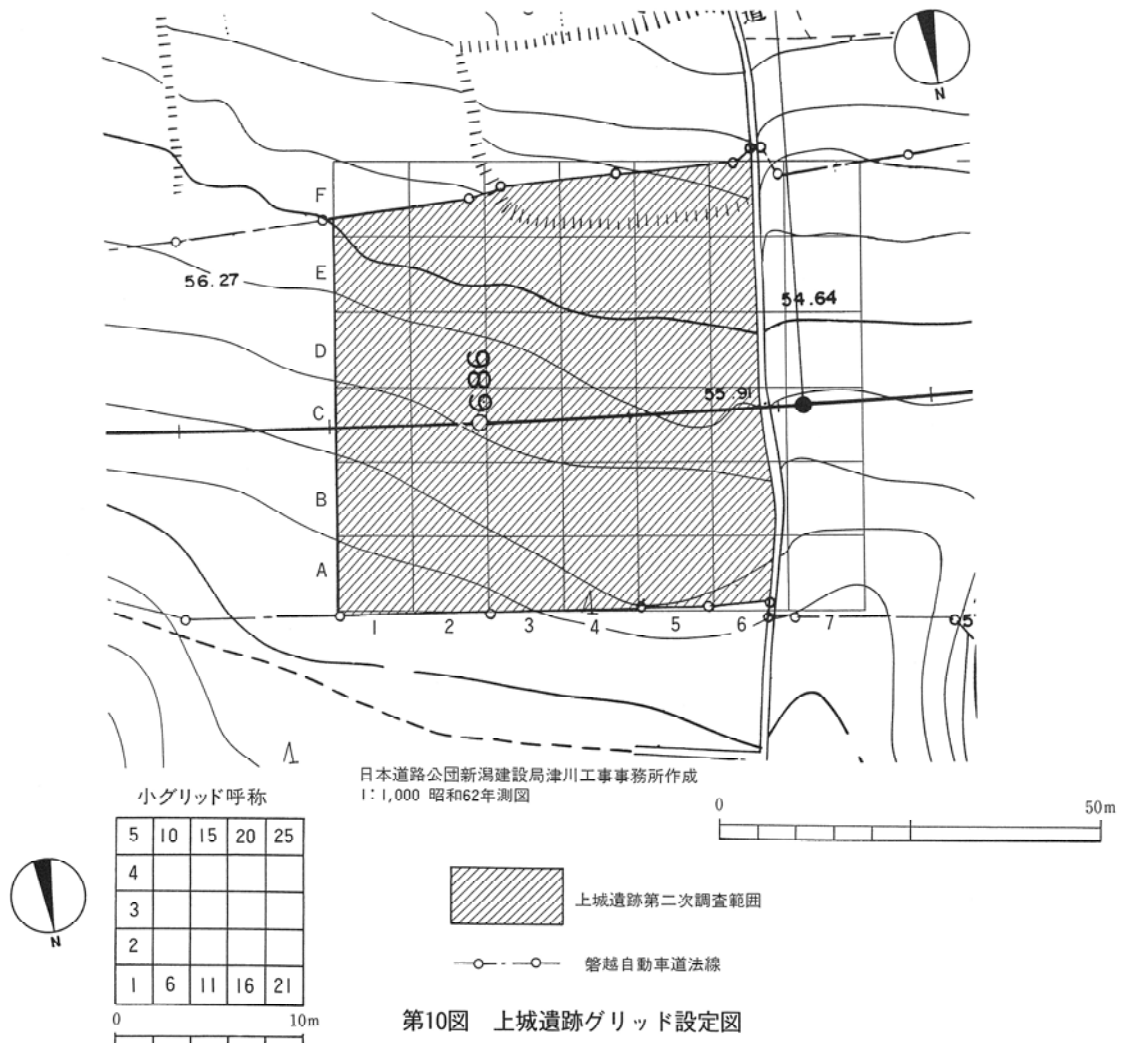
### A 調査方法

#### 1) 調査区の概要

上城遺跡は、阿賀野川右岸の標高約55mの台地上に位置する。阿賀野川との比高差は約25mで、小さな谷を隔て直線距離にして約200m西に蟹沢遺跡が存在する。現在は畑地として利用されており、遺跡の北側は山林である。

#### 2) グリッドの設定 (第10図)

磐越自動車道のセンター杭No.685 (X=193,099.0021、Y=71,149.9447) とセンター杭No.686 (X=193,115.2075、Y=71,051.2761) を結ぶ方向を長軸方向とし、10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真東から11度10分南偏している。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に分割して1～25の小グリッドとし、2B-13のように表示した。



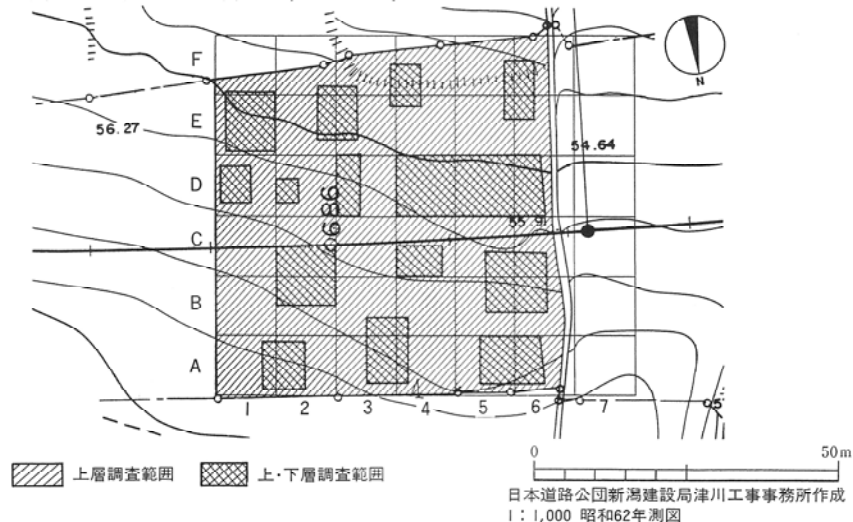
## 3) 調査方法

第一次調査の結果では、遺物包含層は2枚確認されたが、遺物は上層からの出土が大半を占めるため、上層は全面発掘、下層については確認調査を入れながら掘り進めることにした。

**基本層序の確認** 地表面から地山までは深く（約2.5～3m）、さらに伏流水もあり、調査区全域を横断するようなトレンチの設定は危険であった。そのため、適宜場所を選び7m×10m程度のトレンチを開け、そこで層序の確認も行う方法をとった（図版12）。

**包含層の削平** 上層の調査は遺物出土状況から、表土および包含層の削平は重機（バックホー）で行い、包含層出土遺物は小グリッドで取り上げた。下層の調査については、基本層序の確認で述べたトレンチを14基設定（第11図）し、遺構・遺物の有無を確認した。遺物出土は極めて希薄であり、調査区全体（2,800㎡）の35%（1000㎡）を掘削して調査を終了した。上層同様下層の包含層削平も重機（バックホー）によるものである。

**遺構確認** 重機による包含層削平後、人力により最終的な遺構確認を行った。遺構は検出されず、調査終了後の遺跡全景写真を撮影して、調査を完了した。



第11図 上城遺跡第二次調査範囲図

## B 調査経過

上城遺跡の発掘調査は、平成5年8月2日から平成5年10月7日までの期間、蟹沢遺跡と並行して実施した。調査の体制等については第III章2で蟹沢遺跡と併せて記述しているため、ここでは重複を避け上城遺跡の調査経過のみ報告する。

8月2日から5日間、重機（バックホー）による表土剥ぎを行った。8月23日から8月31日までは、調査区内に確認トレンチを開け、遺構・遺物の検出状況や層序を確認した。現地表面から地山までが約3mに達するところもあり、十分な法面をつけて掘削した。トレンチは14か所を数え調査面積は1,000㎡に及んだ。遺物が極めて希薄であり、遺構の検出もなかったため2枚目の遺物包含層（下層）の調査は、当調査をもって終了とした。

9月1日からは確認トレンチ以外の部分について、1枚目の遺物包含層（上層）の掘削を行った。少量の遺物が出土したが遺構は検出されず、9月8日にはほぼ調査が終了した。

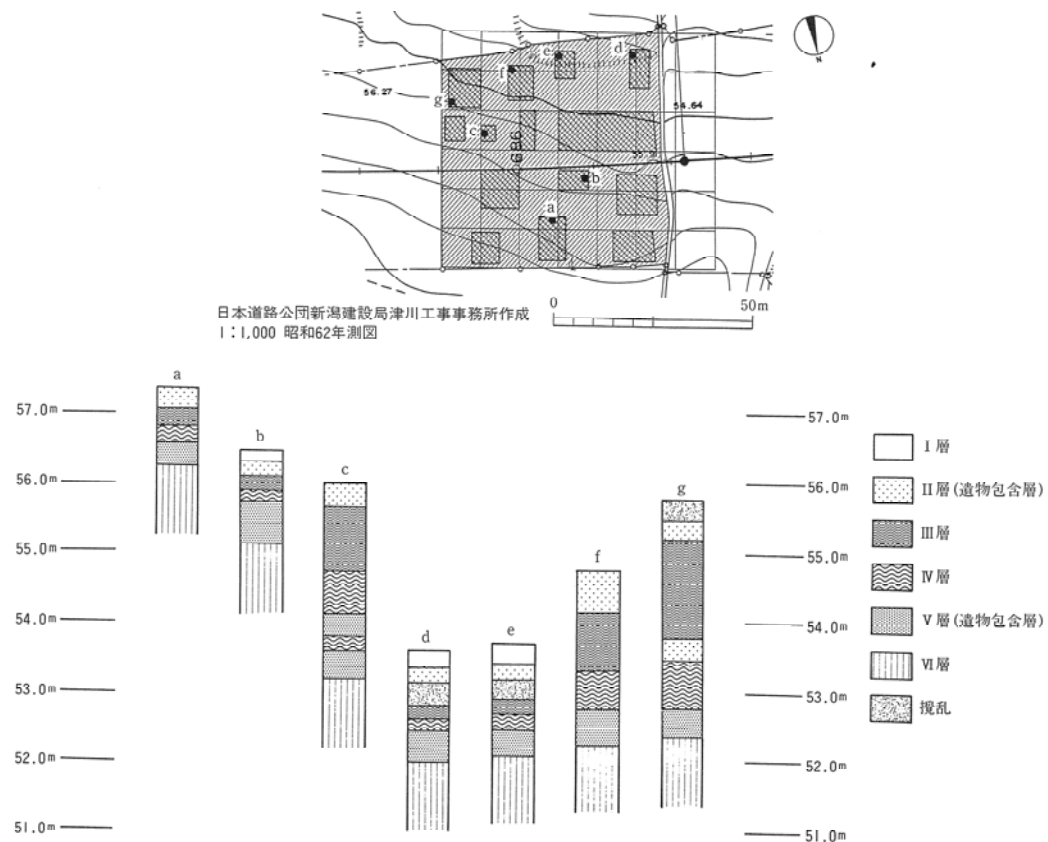
9月17日には、完掘全景写真を撮影した。図面の作成等も全て終了したのは10月7日である。

### 3 層序 (第12図、図版12)

上城遺跡は、上の沢川と下の沢川に挟まれた台地上に立地して、東西約60m、南北約50mの範囲で、北東から南西へ緩く傾斜している。調査区は蟹沢遺跡と同様に、開墾作業・耕作によってかなり大きく削平を受けているものと思われた。また、流れ込みによる砂質土がレンズ状に堆積されていることが確認され、この付近が埋没谷の一部であることも判明した。

基本層序は、明確に分離されるⅠ～Ⅵ層であり、特に細分を要しない(第12図)。調査区内では土層の厚み・色調などに変化はあるものの、Ⅰ～Ⅵ層はほぼ全面に堆積している。

- Ⅰ層 現畑耕作土の暗褐色土である。
- Ⅱ層 黒褐色を呈する縄文時代の遺物包含層である。平均的な厚さは20～50cmである。出土遺物の大半はこのⅡ層からである。この層は、谷が埋没された後に堆積したと思われる。
- Ⅲ層 灰褐色砂質土で遺物を含んでいない。ほとんど砂に近く、レンズ状に数枚堆積している。
- Ⅳ層 灰茶褐色砂質土で遺物を含んでいない。Ⅲ層同様な色調・砂粒の大きさの違いから数枚の砂質土がレンズ状に堆積している。
- Ⅴ層 黒色土で、縄文時代の遺物包含層と思われるが、出土遺物は第一次調査で検出された縄文土器片2点のみである。この層は谷の埋没以前の堆積であるが、Ⅱ層とⅤ層の堆積時期には、あまり時間差がないと思われる。
- Ⅵ層 黄褐色を基本とする地山であり、この上面を最終的な遺構確認面とした。



第12図 上城遺跡土層柱状図

## 4 出土遺物

上城遺跡の出土遺物は縄文時代後期前葉のものが大半を占めており、他の時代の遺物は少量で細片である。また、遺物総量も極めて少なく、整理箱（54×34×10cm）で約2箱であった。遺物の整理は、洗浄・注記を行い接合した。図化可能なものはできるだけ実測し、遺構が検出されなかったため、遺物は全て包含層出土として一括して報告することにした。

### A 土器・陶器（図版6・13）

#### 1) 縄文時代後期前葉の土器（1～15）

##### 深鉢形土器（1～14）

1・2は、いわゆる縁帯文系の南三十稲場式土器である。1は口縁部片であり、楕円形の刺突文が肥厚した口縁部を横位に巡る。胴部には縄文が施文されている。2は、胴部片であり縦位の多条沈線とそれに平行するように滴状の刺突文が施文されている。3・4は、胎土および出土地点から同一個体と思われる。無文の土器で器面は簡単なナデ調整が横位に施されている。頸部から外傾しながら立ち上がる口縁部を有するが、全体の器形は不明である。5・6は同一個体であり、口縁部と胴部との間にくびれをもたず、底部から放物線状に開く胴長の深鉢形土器である。器面には単節縄文（LR）が施され、口縁部付近には炭化物の付着が認められる。7はやや内湾して立ち上がる口縁部を有し、口縁の外側がナデ調整を受けており、丸みを帯びる。器面には縄文が施文されているようであるが明瞭ではない。8は口縁部に1条の浅い横位沈線が巡る。沈線区画の下部には単節縄文（LR）が施文されているが、磨耗が著しい。9～11は胴部片であり、9の器面には撚糸文（L）が施文されている。10は磨耗が著しく、単節縄文（LR）が消えかかっている。胎土には大粒（径1～3mm）の砂粒が目立つ。11は口縁部に近い部分と思われるが、2本の横位沈線区画内に隆帯をもち、その隆帯上に滴状の刺突文が斜めに巡らせてある。12～14は底部片であるが、いずれも小片のため全体の器形は不明である。12は、底面と胴部の境界付近から細縄文（LR）が施された薄手の土器である。13は、基本層序V層の下部から出土しており、他の遺物より時期的に遡る可能性があるが、磨耗が著しく文様が確認できないため詳細は不明である。14の底部外面には網代圧痕が認められる。

##### 鉢形土器（15）

15は小波状を呈する鉢形土器である。波状部は口縁全体では4単位に配される。口縁端部が大きく内側に屈曲し、その端面に1条の凹線を施している。凹線を囲むように連続した刺突文が楕円状に刻まれている。体部には、波状部を中心とする同心円状の弧状沈線および、その沈線間をうめるように弧状短沈線が横位に施文されている。類似資料として佐渡垣ノ内遺跡〔本間ほか1981〕出土の土器があり、縄文時代後期前半に比定されている。

#### 2) 近世陶器（16）

挿鉢の口縁部付近の破片である。素地が褐色を呈し、口縁部の内外面に灰褐色の釉がかけられている。外面はロクロナデ調整が施されており、内面には11本を1単位とする櫛目が認められるが、その全体の単位数は不明である。

## B 石器 (図版6・13)

## 1) 磨製石斧 (17)

いわゆる定角式磨製石斧であるが、刃部が折損しており刃部形態は把握できない。基端には剥落した部分が観察できるが、敲打痕かどうかは不明である。石材は蛇紋岩で、正裏面および側面全体に研磨調整が施されている。

## 2) 不定形石器 (18)

打面は自然面であり、主要剥離は正裏面とも打面から下方向に伸びている。石材は凝灰岩で、正面右側縁には連続した小剥離が、また下端には連続しない小剥離が施されている。

第3表 上城遺跡縄文土器・近世陶器観察表

法量 ( ) 内は現存値を示す

No.	器種	出土地点	法量 (cm)			遺存部位	色調	文 様・他
			口径	底径	器高			
1	深鉢	E 5-8	—	—	(4.4)	口縁部	灰褐色	南三十稲場式、楕円形刺突文、地文縄文
2	深鉢	D 4-17	—	—	(7.8)	胴 部	灰褐色	南三十稲場式、縦位多条沈線文、滴状刺突文
3	深鉢	C 5-10	—	—	(8.7)	口縁部	赤褐色	無文、外面ナデ調整
4	深鉢	D 5-1 他	—	—	(8.0)	口縁下部	赤褐色	無文、外面ナデ調整、3と同一個体
5	深鉢	A 2-21	32.4	—	(21.7)	口縁～胴部	暗灰褐色	地文単節縄文(LR)、外面炭化物付着
6	深鉢	A 2-21	—	9.7	(3.5)	底 部	黒褐色	無文、5と同一個体
7	深鉢	C 3-3	—	—	(2.6)	口縁部	灰褐色	口縁外面ナデ調整、地文縄文?
8	深鉢	C 3-8	—	—	(5.0)	口縁部	暗褐色	口縁部1条の横位沈線、地文単節縄文(LR)
9	深鉢	D 5-2	—	—	(6.5)	胴 部	黄褐色	地文捺糸文(L)
10	深鉢	B 4-15	—	—	(5.8)	胴 部	灰褐色	地文単節縄文(LR)
11	深鉢	D 3-6	—	—	(5.1)	胴部上半	黒褐色	横位沈線区画内隆帯、隆帯上滴状刺突文
12	深鉢	A 4-22	—	—	(2.3)	底 部	赤褐色	地文細縄文(LR)
13	深鉢	B 5-4	—	—	(4.5)	底 部	赤褐色	無文?
14	深鉢	D 3-6	—	8.0	(1.6)	底 部	灰褐色	底部外面網代圧痕
15	鉢	D 3-1	17.0	—	(4.0)	口縁～胴部	赤褐色	4単位小波状口縁、端面凹縁・刺突文、体部弧状沈線
16	搦鉢	A 6-4	—	—	(5.9)	口縁下部	褐 色	口縁部内外面軸、口クロナデ調整、内面11本を1単位とする櫛目

第4表 上城遺跡石器観察表

法量 ( ) 内は現存値を示す

No.	器 種	出土地点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	石 材	備 考
17	磨製石斧	D 4-21	(6.9)	(4.4)	(2.5)	(113)	蛇紋岩	刃部折損
18	不定形石器	F 3-12	3.7	4.8	1.3	16	凝灰岩	正面右側縁および下端に小剥離

## 第V章 まとめ

蟹沢・上城両遺跡は、阿賀野川右岸の緩い傾斜をもつ台地上に位置しており、直線距離にして約200m程離れている。以下、蟹沢遺跡と上城遺跡の発掘調査成果をまとめておく。

### 蟹沢遺跡

調査範囲は東西約100m、南北約40mで、面積約3,500㎡である。当遺跡の現況は畑地であるが、戦後の開墾時やその後の耕作によって、かなり大きく削平を受けており、遺物包含層や遺構の残存状況は良好とは言いがたい。遺跡の時期は、縄文時代後期が主体と考えられる。

遺構は、堅穴状遺構2基、埋設土器2基、土坑2基が検出された。遺構の時期は、出土遺物の大半が縄文時代後期前葉から後葉に属することから、多少の前後はあるものの、ほぼ同時期の所産のものが大半であろうと推察される。今回の調査で堅穴状の落ち込みをもつ遺構が2基検出されたが、残念ながら柱穴や炉の跡が確認されず、また掘形からも堅穴住居とは断定できなかった。当遺跡が、縄文時代後期の集落の一部であったかどうかは判明できなかったが、第II章2で述べたように、当遺跡の僅か200m南側に縄文時代中期～晩期の遺物（縄文土器、磨製石斧、石棒、石匙、小玉等）が表採されている堂田遺跡の存在を考えると、堂田遺跡付近を中心とする集落の周縁部であった可能性は否定し得ない。しかし、堂田遺跡の発掘調査は行われておらず、この解明には今後の調査・研究を待たざるを得ない。

出土遺物は整理箱にして、約3箱が出土したが、大半は縄文時代後期の土器や石器である。その他に、縄文時代中期前葉の土器および近世陶器の播鉢の破片が出土している。当遺跡の主体をなす縄文時代後期の遺物の中で、時期がある程度特定できるものとして在地系の3～7・22が特筆できよう。3～7は、胴部に櫛歯状工具等でX状の平行沈線文や、太目の平行沈線文を施すことを特徴としている〔中村1966〕いわゆる南三十稲場式土器であり、『城之腰遺跡』の城之腰Ⅶ2期（後期前葉）にほぼ相当する〔国島1991〕。また22は、後期中葉の加曾利B2式に併行し、県内では三仏生式と称せられている土器であり、『刈羽大平・小丸山』〔品田ほか1985〕の第Ⅲ群土器に比定できる。

### 上城遺跡

調査範囲は東西約60m、南北約50mで、面積は2,800㎡である。当遺跡付近は、蟹沢遺跡同様に開墾・耕作等によってかなり削平を受けている。また、当地域は埋没谷の一部分であったが、縄文時代後期前葉頃には、すでに谷は埋没していたようであり、砂層の上位層から縄文時代後期前葉の土器が出土している。遺跡の時期は、縄文時代後期前葉が主体と考えられる。

今回の調査では、遺構は検出されず、出土遺物は整理箱にして約2箱出土したが、その大半は縄文時代後期前葉のものである。その他に、近世陶器の播鉢が1点出土している。出土遺物の中には、『城之腰遺跡』〔国島1991〕の城之腰Ⅶ期（後期前葉）にほぼ比定される土器1・2が出土しており、蟹沢遺跡との関連性も考えられるが、資料が少ないことや破片のみであり、不明な点が多い。

以上、簡略に両遺跡の調査成果を述べたが、資料数が少ないことや細片のため全体の器形が十分に把握できないことなどから、詳細については不明な点が多い。両遺跡の立地する台地上の他の遺跡（堂田遺跡等）の発掘調査や研究の成果を待ち、当該遺跡の性格もより明確になっていくものと期待している。



# 要 約

## 蟹沢遺跡

- 1 蟹沢遺跡は、新潟県東蒲原郡三川村大字小石取字蟹沢に所在する。遺跡は、阿賀野川右岸の標高約50mの台地上に位置する。阿賀野川との比高差は約20mを測る。
- 2 発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成5年7月26日から10月8日にかけて実施した。調査面積は約3,500㎡である。
- 3 調査の結果、縄文時代後期の遺構・遺物が検出された。
- 4 縄文時代後期の遺構には、竪穴状遺構2基、埋設土器2基、土坑2基がある。蟹沢遺跡は、縄文時代後期を中心とした時期の集落の周縁部に位置していたと推測される。
- 5 出土遺物は、整理箱（54×34×10cm）で約3箱と少量であり、縄文時代後期のものが大半を占めている。そのほかに、縄文時代中期前葉の土器および近世陶器の插鉢の破片が数点ある。

## 上城遺跡

- 1 上城遺跡は、新潟県東蒲原郡三川村大字小石取字上城に所在する。遺跡は蟹沢遺跡の約200m東に位置し、阿賀野川右岸の標高約55mの台地上に位置する。阿賀野川との比高差は約25mを測る。
- 2 発掘調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成5年8月2日から10月7日にかけて、蟹沢遺跡の発掘調査と並行して実施した。調査面積は約2,800㎡であるが、遺構は検出されなかった。
- 3 出土遺物は、整理箱（54×34×10cm）で約2箱と少量であり、縄文時代後期前葉のものが大半を占めている。そのほかに、近世陶器の插鉢の破片が1点出土した。

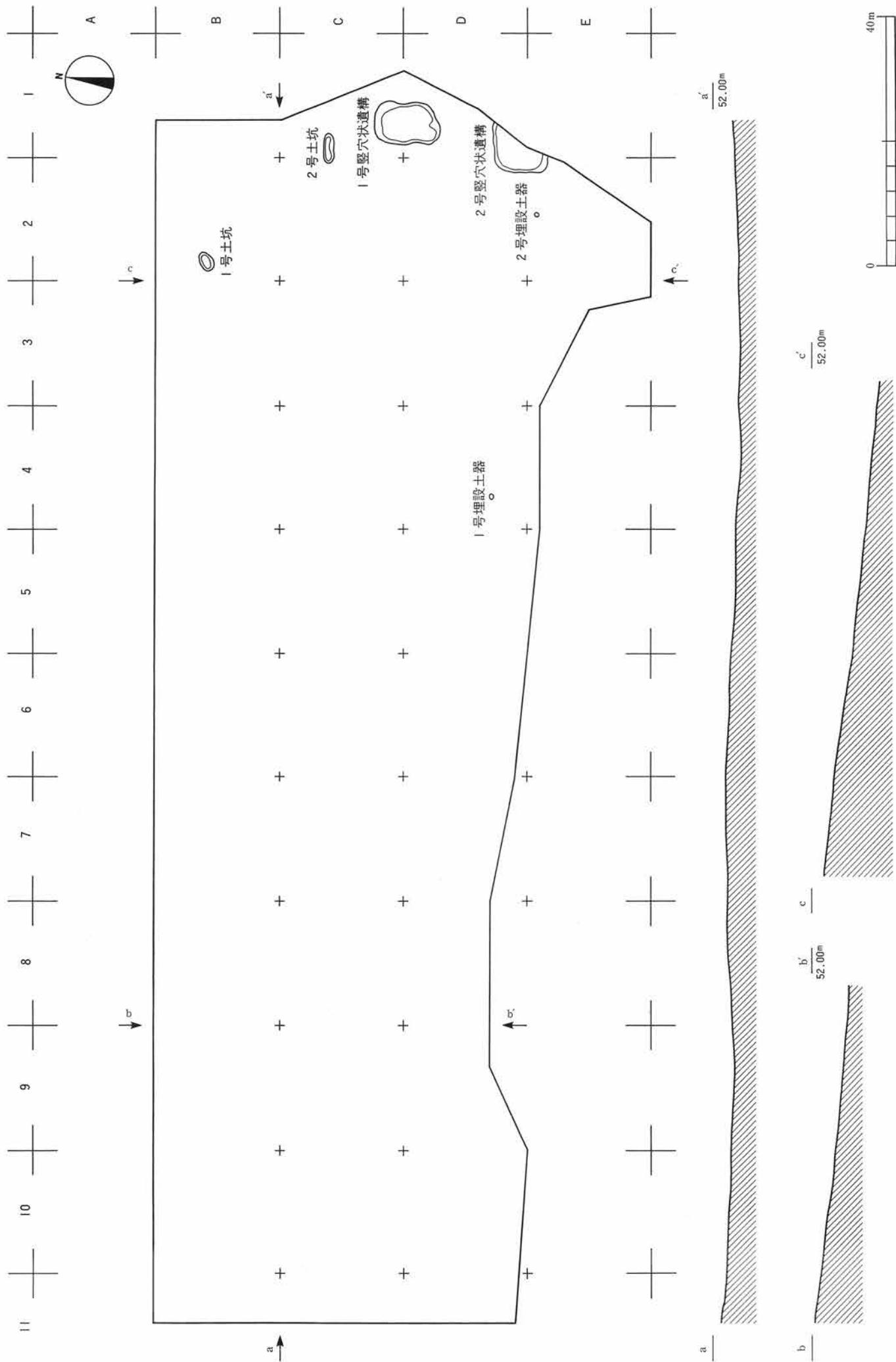
引用・参考文献

- ア安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成3 後期』 講談社
- イ池田 亨ほか 1990 『大和町埋蔵文化財調査報告第4号 水上遺跡』 大和町教育委員会
- 力亀井 功ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 萩野遺跡・官林遺跡』 新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- キ北村 亮ほか 1990 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原I遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会
- ク国島 聡ほか 1991 「城之腰遺跡出土土器分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
- サ佐藤雅一ほか 1986 『湯沢町埋蔵文化財調査報告第5輯 川久保遺跡』 湯沢町教育委員会  
佐藤雅一 1987 『湯沢町埋蔵文化財調査報告第6輯 川久保遺跡II・宮林B遺跡』 湯沢町教育委員会
- 沢田 敦ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点』 新潟県教育委員会 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- シ品田高志ほか 1985 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 刈羽太平・小丸山』 柏崎市教育委員会
- ス鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識III 縄文』 柏書房
- タ高橋 保ほか 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 1994 「蟹沢・上城遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』 小学館
- ツ津田禾粒ほか 1986 『新潟県下越地域土地分類基本調査 津川』 新潟県農地部農村総合整備課
- ナ中島栄一 1986 「後期の文化」『新潟県史 通史編1』 新潟県
- 中村孝三郎ほか 1957 『三仏生』 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1975 『根立遺跡』 長岡市立科学博物館
- ニ新潟県 1983 『新潟県史 資料編1』 新潟県
- ヒ樋口昇一ほか 1981 「関東・中部・北陸地方」『縄文土器大成2 中期』 講談社
- フ藤巻正信ほか 1991 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
- 藤村東男 1984 『縄文土器の知識II 中・後・晩期』 東京美術
- 木本間嘉晴ほか 1962 『新潟県文化財年報第四 阿賀一東蒲原郡学術総合調査報告書一』 新潟県教育委員会
- 本間嘉晴ほか 1981 『垣ノ内遺跡 新潟県佐渡郡新穂村垣ノ内遺跡発掘調査報告』 新穂村教育委員会

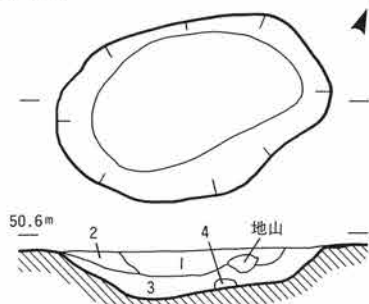
# 図 版

## 凡 例

- 1 ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺構は種別毎に一連番号を付し、土坑、  
竪穴状遺構、埋設土器などで分類した。
- 3 遺物は、遺跡毎に一連番号を付し、写真もこれにしたがった。
- 4 遺物実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離すか、断面と外形線のみ表示した。
- 5 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。

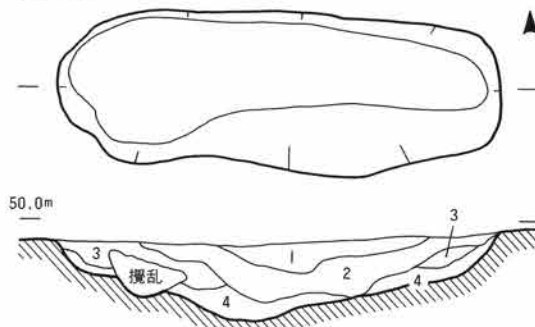


1号土坑



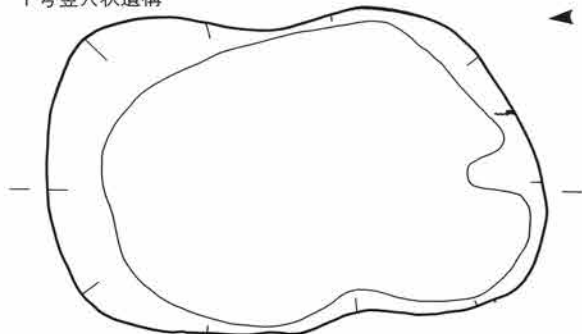
- 1 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。微量の炭化粒を含む。
- 3 褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。微量の炭化粒を含む。
- 4 暗褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。微量のローム粒を含む。

2号土坑

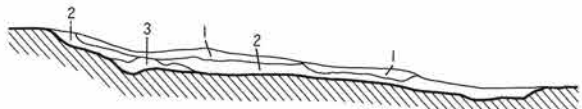


- 1 暗褐色土 粘性をもつが、ややしまりに欠ける。微量の炭化粒・ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 粘性をもち、しまる。少量の炭化粒、微量のローム粒を含む。
- 3 暗褐色土 粘性をもち、しまる。少量のローム粒を含む。
- 4 暗黄褐色土 粘性をもち、固くしまる。少量のローム粒を含む。

1号竪穴状遺構

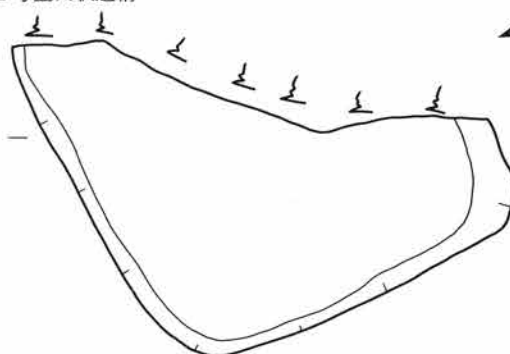


50.0m



- 1 黒暗褐色土 粘性をもち、しまる。多量の炭化粒・ローム粒を含む。
- 2 褐色土 粘性をもち、しまる。微量の炭化粒・ローム粒を含む。
- 3 黄褐色土 粘性をもち、ややしまりに欠ける。多量のローム粒を含む。

2号竪穴状遺構

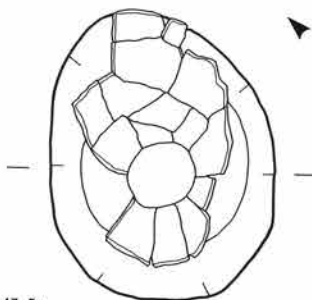


48.5m

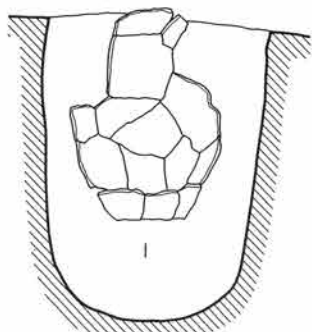


- 1 暗黄褐色土 粘性をもち、しまる。多量のローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 粘性をもち、しまる。多量の炭化粒・ローム粒を含む。

1号埋設土器



47.5m

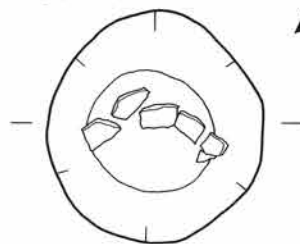


- 1 黒褐色土 やや粘性をもつが、しまりに欠ける。微量のローム粒を含む。

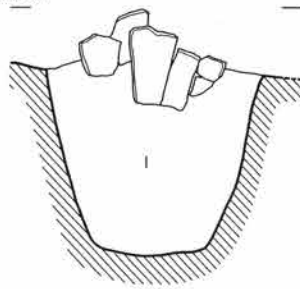


9

2号埋設土器

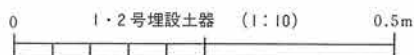
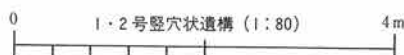
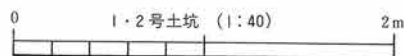


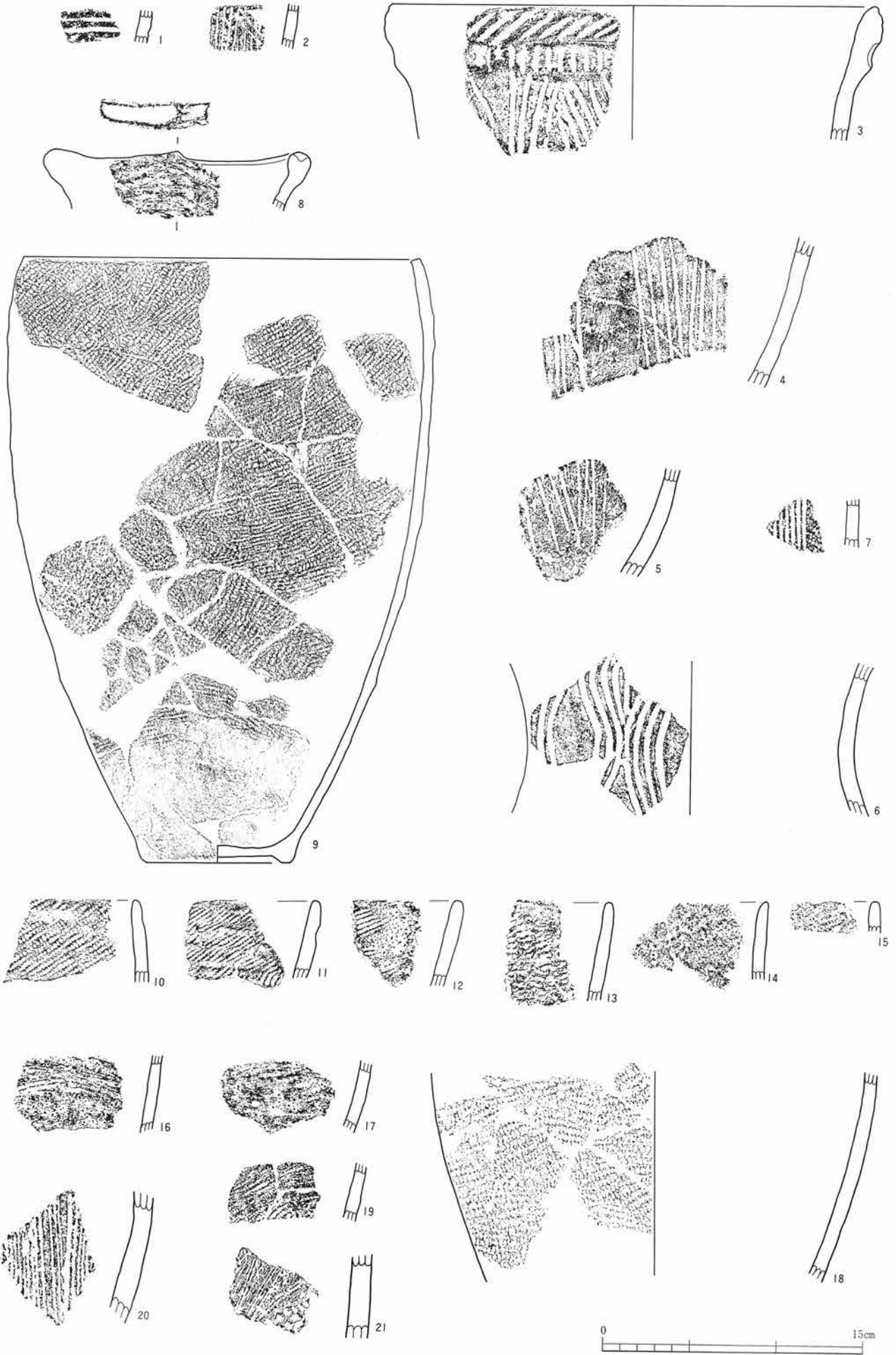
48.5m

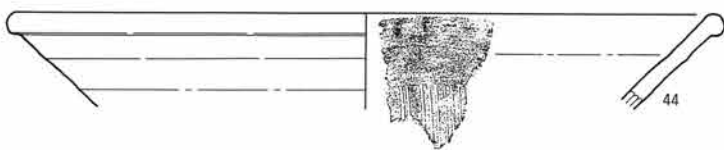
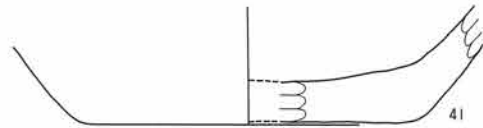
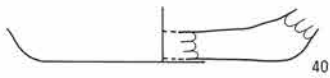
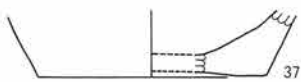
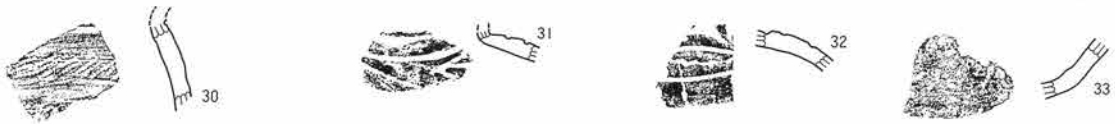
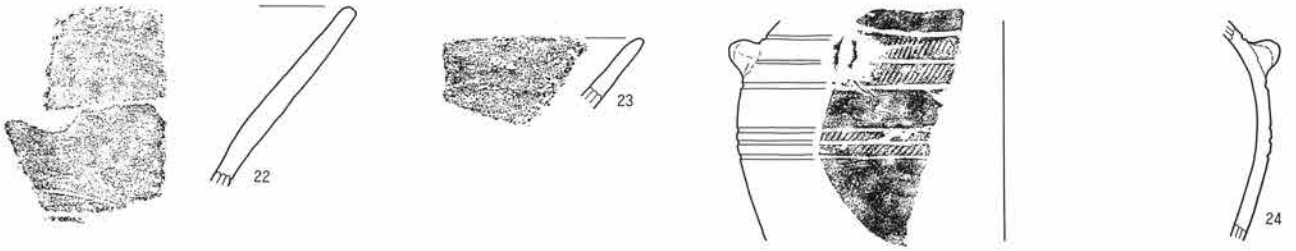


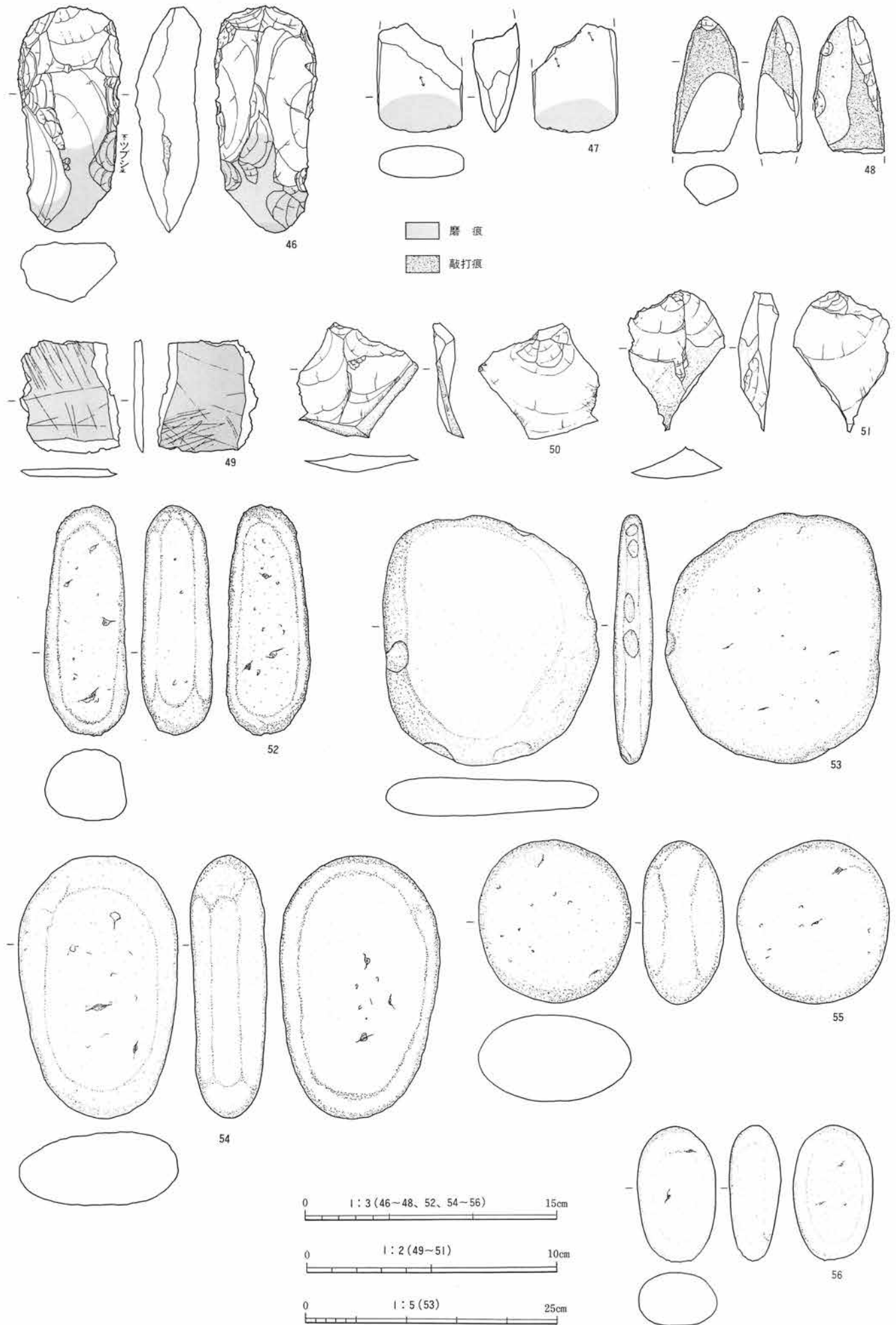
- 1 暗褐色土 粘性・しまりに共に欠ける。少量のローム粒を含む。

18

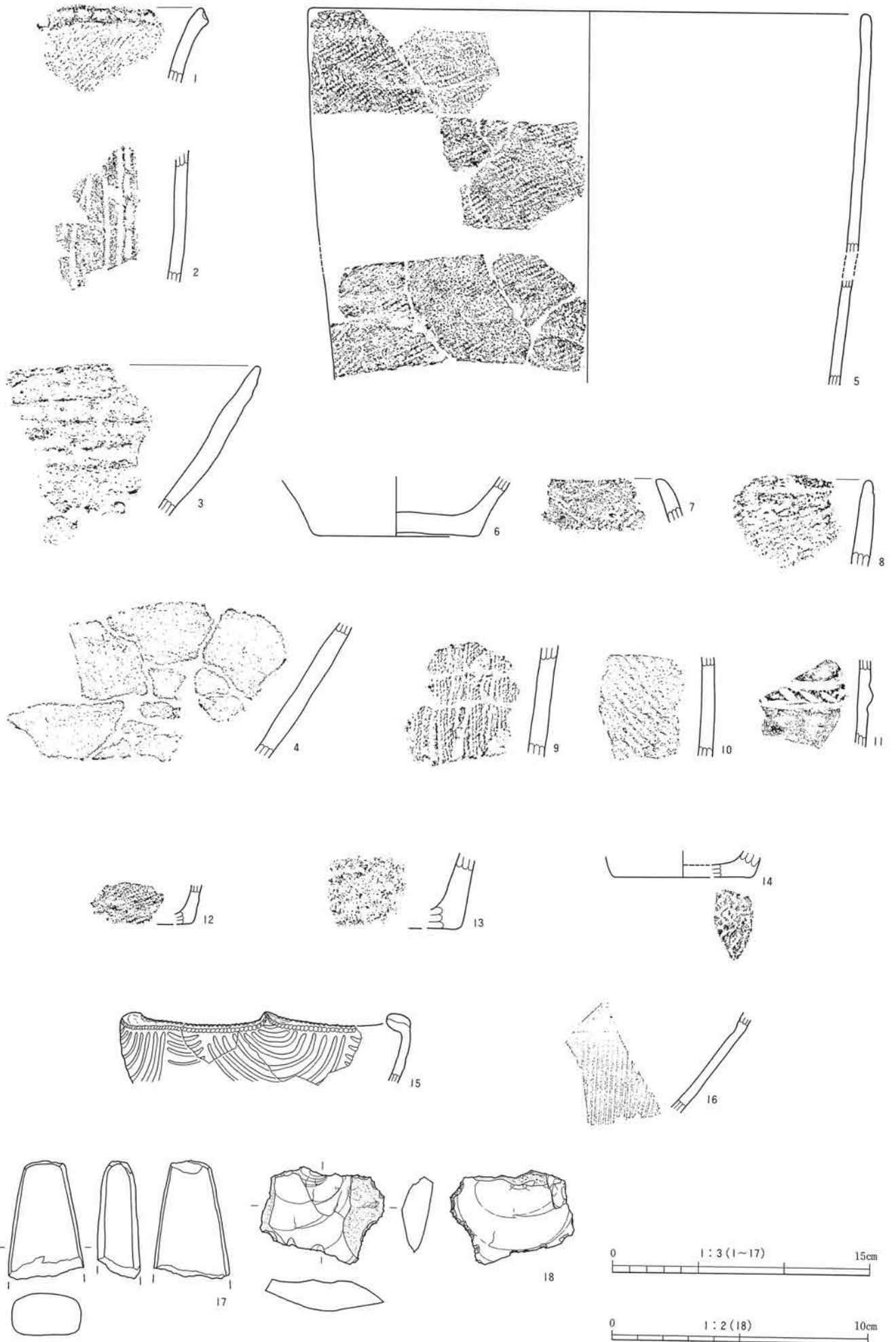














1. 完掘全景  
西から



2. 1号埋設土器  
南東から



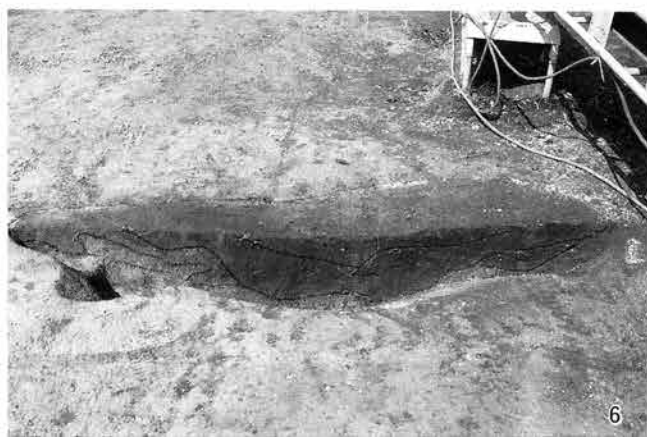
3. 2号埋設土器  
南から



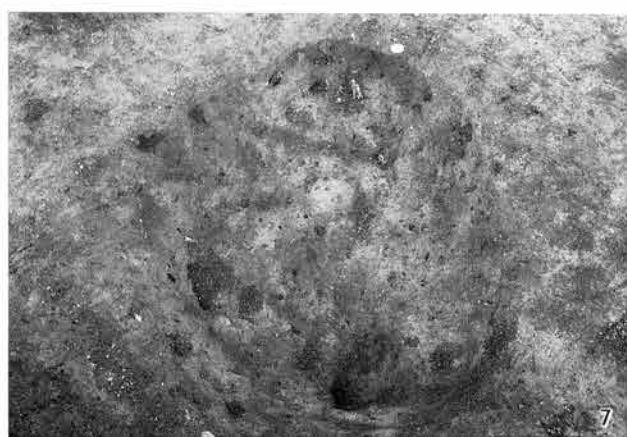
4. 1号土坑土層  
断面  
南東から



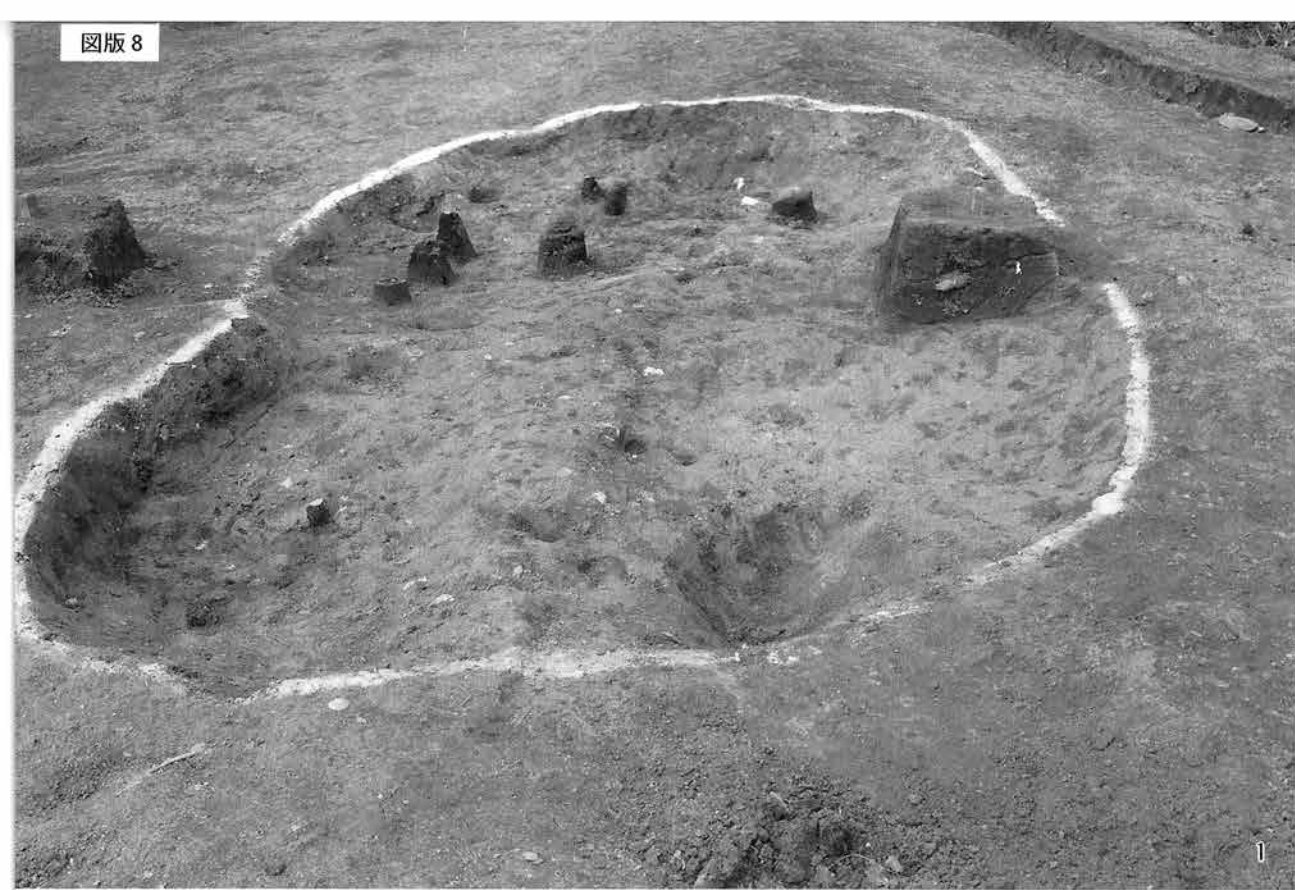
5. 1号土坑完掘  
南西から



6. 2号土坑土層  
断面  
南から



7. 2号土坑完掘  
西から



1. 1号竪穴状遺構  
完掘  
南から



2



3

2・3. 1号竪穴状遺構  
土層断面  
西から



4



5

4. 2号竪穴状遺構  
土層断面  
西から

5. 2号竪穴状遺構  
完掘  
北西から



6



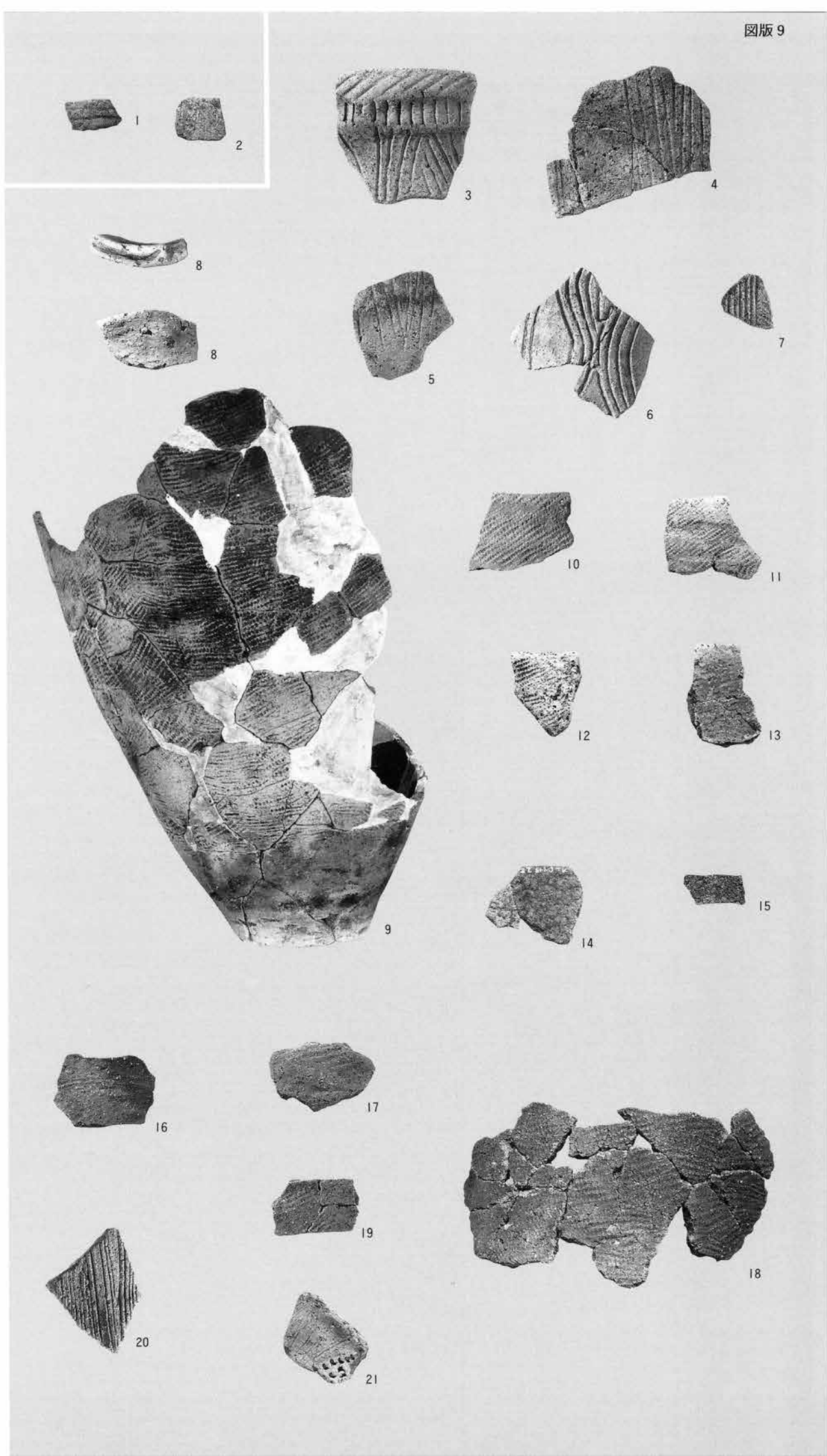
7

6. 東西土層断面  
南から

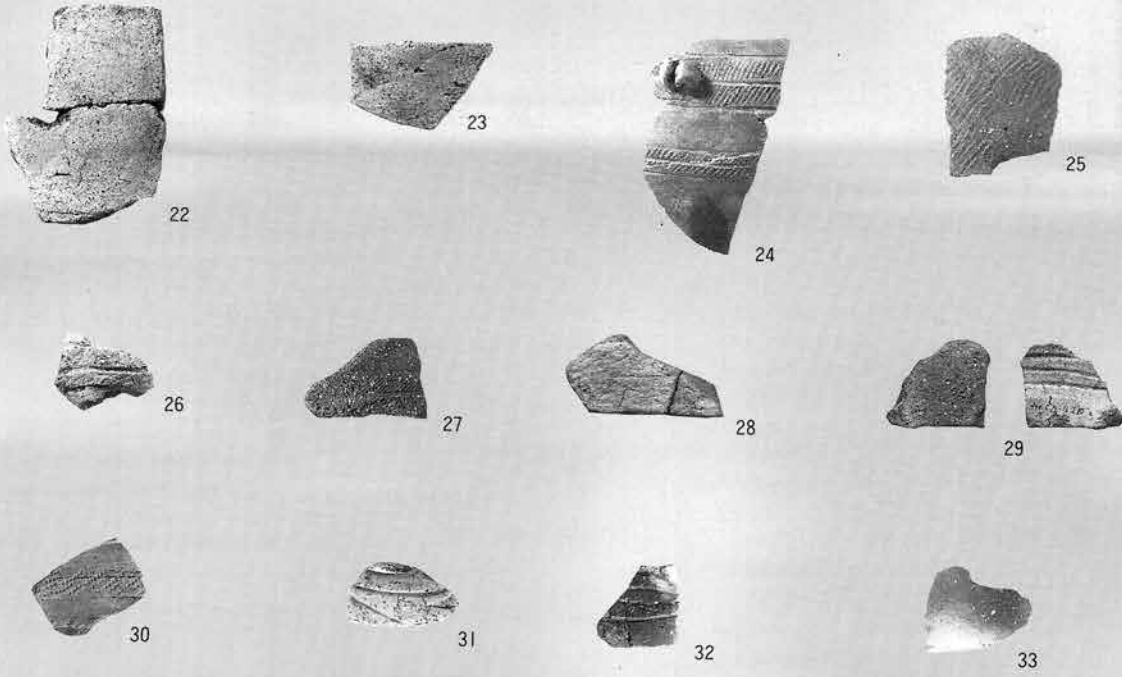
7. 蟹沢遺跡全景  
北東から



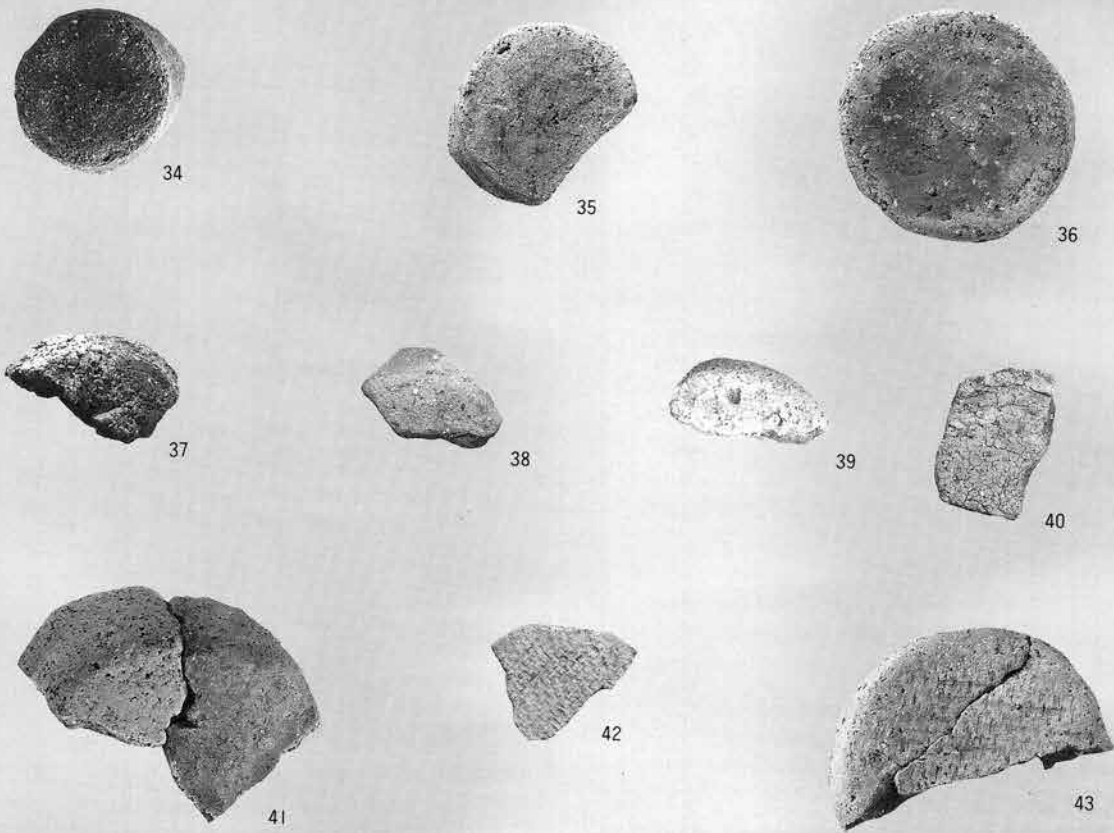
1 : 3  
(1・2)



1 : 3  
(3~21)



1 : 3  
(22~33)



1 : 3  
(34~43)



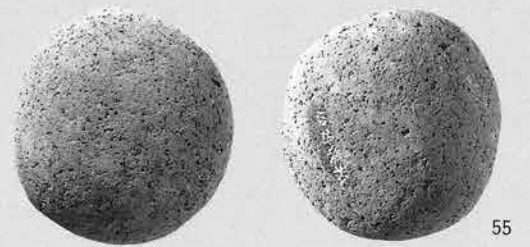
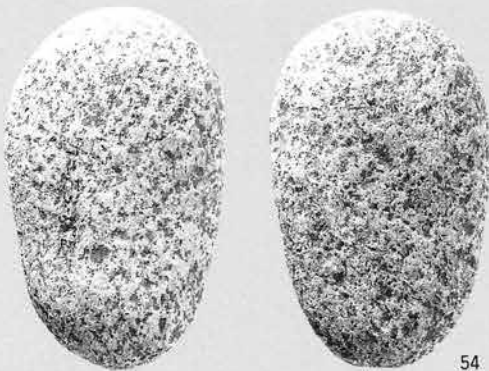
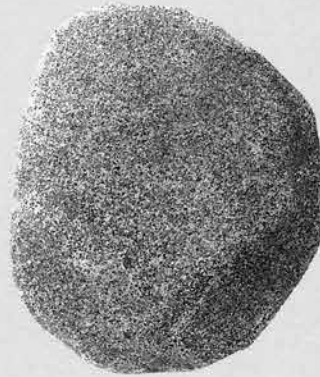
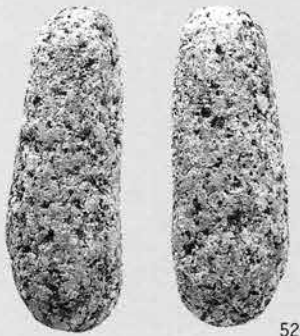
1 : 3  
(44~45)



1 : 3  
(46~48)



1 : 2  
(49~51)



1 : 3  
(52・54~56)

1 : 5  
(53)



1. 完掘全景  
西から



2. 基本土層断面  
南西から



3. 下層調査風景  
西から



4. 下層2トレンチ  
完掘  
北から



5. 下層10トレンチ  
完掘  
西から

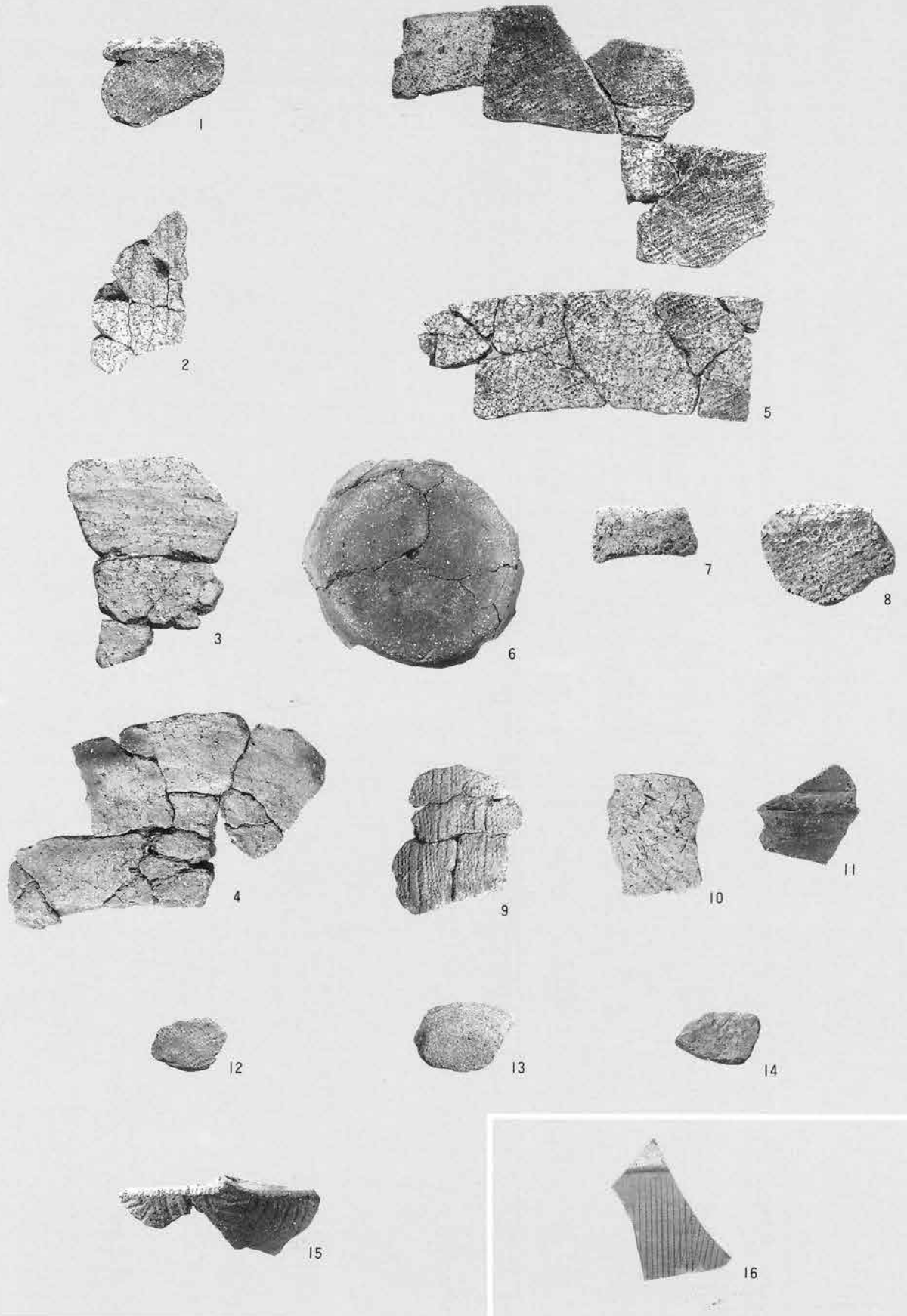


6. 作業風景



7. 重機による  
包含層削平  
南東から

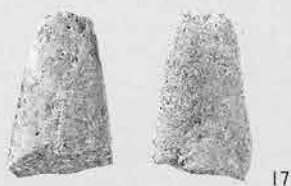




1 : 3  
(1~16)

1 : 3  
(17)

1 : 2  
(18)





報告書抄録

書名	かにさわ うえじょう 蟹沢遺跡・上城遺跡							
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第70集							
編・著者名	佐藤正知・滝沢規朗・上田順二							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL.025-223-5642							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
蟹沢遺跡	新潟県東蒲原郡三川村 大字小石取字蟹沢	15-384	28	37 44' 18"	139 18' 24"	19910527～ 19910605 19930726～ 19931008	3,500m <sup>2</sup>	磐越自動車道建設
上城遺跡	新潟県東蒲原郡三川村 大字小石取字上城	15-384	29	37 44' 18"	139 18' 28"	19910527～ 19910605 19910819～ 19910830 19930802～ 19931007	2,800m <sup>2</sup>	磐越自動車道建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蟹沢遺跡	遺物包含地	縄文時代後期	竪穴状遺構2基 埋設土器2基・土坑2基		縄文土器・石器（打製石斧、磨製石斧、剝片他）			
上城遺跡	遺物包含地	縄文時代後期			縄文土器 石器（磨製石斧、不定形石器）			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第70集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

かにさわ うえじょう  
蟹沢遺跡・上城遺跡

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

新潟県教育委員会

(財)新潟県埋蔵文化財

調査事業団

新潟市一番堀通町5923-46

電話 (025) 233-5642

印刷

北越印刷株式会社

長岡市福住1丁目6-27

電話 (0258) 33-0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第70集『蟹沢遺跡 上城遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	蟹沢遺跡 北緯	37度44分18秒	37度44分16秒
抄録	蟹沢遺跡 東経	138度18分24秒	138度18分12秒
抄録	上城遺跡 北緯	37度44分18秒	37度44分16秒
抄録	上城遺跡 東経	138度18分28秒	138度18分21秒